
日が昇り、京の景色は美しい

おもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日が昇り、京の景色は美しい

【Nコード】

N6703M

【作者名】

おもち

【あらすじ】

「銃声がおわるまで」の続編です。無事高校3年生になった新一年たち。そんな彼らが通う帝丹高校が、毎年2校のみがもらえる宿泊行事のための特別交付金にあたった。行先は京都に決定。ところが、その交付金があたったもう1校は、なんと江古田高校だった。行先や日程が似ていたので、2校は共同で行くことに……。さらに、この日は記念日で休み、と大阪組も加わることになった。さまざまな人が京都に集まり、京都豪華旅行は一層豪華に。新一年たちはユニークな舞妓探偵にも出会う。ただ、探偵は事件を呼ぶようで……。

彼らは誘拐事件に巻き込まれてしまう。人質を助けるために究極の班行動をする新一たち。そして蘭たちにも危機が！ 怪しげな組織を倒すため、CIA、FBI、日本警察、インターポール、探偵・
・あの時のメンバーが京の都に集まる！

プロローグ 帝丹高校の教室で

「ってことで、今年わが帝丹高校が抽選でひきあてた特別交付金による宿泊研修は、京都に2泊3日になりました！」

「京都、やったあ！」

「えー、京都かよ・・・中学の時も京都だったのに・・・。」

「はいはい、静かに！ し・ず・か・に！ 特別交付金による宿泊研修実行委員会で決まったんだから文句言わないの！」

「鈴木！ おまえ先生にわいりでも送ったんじゃねえの？」

「この金額なら海外行けるだろ！ なんて国内、しかも京都なんだよー！」

「と・に・か・く、決まったんだから文句言わない！ 京都豪華旅行なんて最高じゃない！ ってことで班決めしまーす！」

「何人班？ 男女別？」

「自由行動あるの？」

「小遣いいくら？」

「班は4、5人班で男女混合。1日目はクラスや学年での行動になるけど、2日目と3日目は班行動でタクシーにするみたいだから。」

お小遣いは自由だけど、一万円くらいが相場？ プラスで拝観料とか食費とか。」

「園子、いないひとはどうするの?..?」

「うーん、決めちゃっていいんじゃない？ ねえ志保ちゃん。」

「ええ。それでいいと思うわ。」

「じゃあ、決めちゃうわよ!」

「」「」おー!!」「」「」

(ごめんなさい、工藤君。でも事件を優先させたあなたがわるいんだから。)

志保がふっ、と笑った。

最悪の展開？

「つてことで決定！」

パチパチパチ・・・

ガラガラガラ・・・

「すみません、先生。なにせ事情聴取を受けなきゃいけない・・・」

「工藤！ ごめんな！」

「どんまい！」

「まつ、がんばれい！」

男子が口々に謝りだした。

「な、なんだよ。」

「ごめん新一。行先決まったから・・・もう班決めしちゃって・・・」

「行先？ どこになったの？」

「京都。昔、散々な目に会ったのを今でも覚えてるわ。」

「京都!?! うわー、最悪。あいつらとかぶってるし。」

「あいつら? 誰のこと?」

「江古田高校のやつら。さっき連絡来たんだよ……。」

「きゃー、怪盗キッド様!」

「園子、同じ日とは限らないじゃないの。」

「そうかしら、蘭さん。」

ガラガラガラ……

「変更点が増えた。今年は江古田高校と行先が同じなので一緒に行動することになった。まあ、ほかの高校と仲良くなることはいいことだろう。」

「はあ!?!」

「なんだ工藤。そうか、友達がいるんだってな。」

「それと……班決めしちゃってね……新一はわたしと志保ちゃ

んと園子との4人班なんだ・・・。」

「ほかの班はもっとバランスがいいんだけど、人数が合わないのよ。」

「ごめんな、工藤！」

「はあ。」

西からお電話

「工藤、元気か？ 俺や俺。」

「探偵にオ……。」

「オレオレ詐欺とは運が悪いって言いたいんやろ？ 二度と同じ手はくわへんで。にしてもラッキーやなあ。」

「何が、ラッキーだよ。黒羽たちとかぶるなんて……。」

「ラッキーにきまつとるやろ。元祖高校生探偵、白馬探様に月下の奇術師、黒羽快斗様。さらに西の高校生探偵、服部平次様がお伴するなんて、えらい豪華な京都旅行やで。」

「はあっ!?!?」

「なんや、工藤。わかつたでえ、自分の名前がないからやろ？ ほんなら入れたるわ。東の高校生探偵……。」

「服部、悪いが俺たちは金、土、日でいくんだ。お前は来れないだろ?」

「ところが、今は土日は学校がないんや。」

「関西はそうなのか……。」

「工藤ここは休みがないんか!?!?」

「冗談冗談。でも、金は少なくとも・・・。」

「ご安心ください、つてとこやな。その日、改方学園はなんたら記念日で休みなんや。ラッキーやろ?」

「ラッキーじゃない。」

「まあええわ。詳しいことは黒羽たちに聞いたんけど・・・ここからが本題や。和葉も付いてくるゆうてるんや。姉ちゃんたちに伝えてくれへんか?」

「わかった。じゃあな。」

「そうそうけど・・・って切るなあ!」

「2度と同じ手はくわへんで、じゃないのか? 服部。」

面倒が増えた、と新一は顔をしかめた。

新幹線

「く・ど・う！」

シュパーン！

「黒羽か。頼むから公共の場ではトランプ銃を使わないでくれ。」

「分かったって・・・白馬もにらむなよ・・・。」

東京駅、新幹線のホームに並んだ高校生たちが動き回っていた。

蘭たちも、青子と再会して楽しそうだった。

「新幹線来るぞー！そこ、もっと内側によれ！」

「あら、ごめんなさい。」

「高校生に間違われるとは・・・。」

「あつ、失礼しました！ てつきり・・・ビデオをお持ちなので。」

「ふふふ。」

「ふう、なんとか乗れた・・・さてと、これ読むか。」

新一は読みかけの推理小説を開いた。

新幹線は走り出した。さっそくゲームをやったりお菓子を食べたりし始めた。

「新一！ お菓子食べる？」

「蘭、あきらめな。いいじゃないの。あたしたちで食べちゃえば。」

「園子さんの言う通りよ。推理小説に熱中しているときは、97パーセントの確率で食事を忘れる人だから。」

「ああ、蘭。それ食べる。」

「新一？」

「いいえお嬢さん、黒羽快斗です。」

「なんだ、黒羽君か。」

「黒羽君、もう予告状出さないの？」

「挑戦は受けて立つけど・・・しかし、鈴木財閥ってすごいよな。」

「こないだ親父が言ってたぜ。物足りないって。」

「じゃあ、この間の早川財閥のやつって……。」

「黒羽盗一さん？」

「へえ、気付かなかったなあ。」

「青子も気づかなかったの。ずーっと快斗が盗んだと思ってた。」

「わたしは気づいてたけど……やっぱり盗み方が違うのよ。」

「さすが、鈴木財閥の御令嬢。」

「キッドファンならわかるわよ。」

「ねえ園子。早川財閥って？」

「すごい財閥よ。でも、後継ぎの息子さんを事故でなくされたらしいわ。あれ？でも娘さんがいたような。」

「偽者だったそうよ。秘書が仕立てたって。本物の子を殺そうとして捕まったけど。」

「さすが志保ちゃん。何でも知ってるね。」

「たしか舞妓を二人殺したんですよ。でも本命の子は殺し損ねたそう。結局、その子は名乗らなかったそうですよ。」

「白馬君も詳しい！新一よりいい探偵さんね。」

「蘭……。」

「いえ。事件の調書があったので。白鳥って警部さんが詳しく書いていたみたいです。本物の子が名乗らないし、かわいそうだと言って、早川さんは偽者の子も引き取ったみたいですよ。もちろん犯人の秘書は逮捕されました。」

「おい、あれ黒羽快斗じゃない？」

「隣は白馬っていう探偵だろ？」

「おーい！ サインくれ！」

「きゃー！ キッド様！」

新幹線は大混乱に陥った。

「あなた……新ちゃんにばれたかしら？」

「まだ大丈夫だ。やれやれ、出版社の連中も撒いてきたし……。」

「工藤さん？」

「盗一……来れたか。」

「有希子ちゃん、元気？」

「千影ちゃんこそ。」

「白馬は？」

「来れなかったみたいだ……事件だろう。」

「服部は来るそうです。京都駅で待っていると。」

「となると、平次君も？」

「らしいですな。」

京都見物 in 宇治・伏見

新一たちは、京都に着いた。バスに乗り、名所を回る。

「平等院かあ。」

「意外とちやつちいな。」

「新一！ 写真撮って！」

「快斗も！」

「すごい込み具合ですな。」

「江古田と帝丹は時間をずらしたほうがいいかもしれません。」

先生たちがひそひそ話し合った。

「伏見稻荷かあ。」

「千本鳥居が有名ですよね。」

「白馬、こじって御利益あるの？」

「稻荷信仰の総本山ですよ。」

「じゃあ、商売繁盛かあ。頼みます!」

「黒羽……。」

「逮捕したくてたまらない……。」

「青子も……。」

「やめろよ、おい。」

「ねえ紅子ちゃん……やめて。」

「赤魔術と赤い鳥居……なにか関係ありそうで。」

「いや、ないから。」

「黒羽君。災難が近付いている……紅い場所に注意しなさい。青と赤は仲が悪い。青を赤に連れていくべからず。」

「うす気味悪いぞ。そこの狐みたいだ。」

京の五条の橋の上

次は清水寺。

自由行動でお土産を買いいいチャンスだ。

その後、いったん祇園のホテルに荷物を置き、食事をとる手はずになっていた。（お昼は豪華弁当を車内で食べた。）

「すんまへん。駐車場で手違いがあつて……ここで10分ほど待たなあかんのですが。」

「そうか……。ちょっと電話で相談するから……。」

ブ
ン

「つてことで、10分ほど五条大橋の見物だ。写真を撮ったり、体を動かしたりしていいぞ。時間は守れよ。」

みんな降りて、写真を撮ったりしていた。新一、快斗、探は橋の上でぼんやりしていた。

蘭たちは写真を撮っていた。

「京の五条の橋の上、大の男の弁慶が、長い薙刀振り上げて、牛若めがけて切り下ろす！」

ビュン！

「今日は竹刀がないんや。すまん。」

「服部！」

「いやーこころしいと聞いてバイクとはしてきたんや。和葉もおるで。」

「まだ団体行動なんですよ。服部君。」

「大丈夫や。くつついとるだけやし、バイクもある。俺らは和葉の親戚の家に泊まる。それでええやろ？」

「まあな。次は清水寺だ。でも江古田と帝丹は時間がちよつとずれる。」

「わかったで。どうせお前ら一緒に行動するために、どっちかが待っつんやろ？」

「帝丹が先だつてさ。」

「なら俺は先。工藤とおるわ。」

「じゃあ、舞台上で待ってるからな。来いよ。」

「おい、帝丹の子は早く来い！ 置いてくぞー！」

「じゃあな。」

「バイクで追っかけるでえ。」

清水の舞台

「すぐく混んでるわね。もう、やんなっちゃう!」

「仕方ないよ、園子。」

「世界遺産だし、昔からここの舞台は有名だから。清水の舞台から飛び降りる・・・本当に飛び降りた人もたくさんいたみたいだし。」

「え? 本当にいるの?」

「そうらしいわ。」

「死んじゃうじゃない?」

「そうね。命の保証はできないわ。」

「まあ、せやけど・・・今日はすいてるほつやで。休みの日はめっちゃ混んどるし、なあ平次。」

「ああ?」

「あつ、何しとるんや!」

「ええやないか・・・試食なんやし・・・。」

「ここが清水の舞台やで。」

「蘭ちゃんと園子ちゃんと3人で来たことあるんや。有名やし説明せんでもええやろ?」

清水の舞台はそれなりに混んでいた。

観光客はみんな手すりギリギリまでよって、写真を撮ったり景色を見たりしている。

スケッチをしている人や着物姿の人もいた。

「ここならじゃまにならないね。」

「黒羽君たちを待とつか。」

新一たちは江古田組を待ったため、手すりから離れ、奥のほうに寄った。

「キヤー！ー！」

「なんや！？」

「こつちだ！」

新一たちは舞台のほうへ駆けだした。

着物姿の女性が2人、襲われていた。

もう一人の着物姿の女性はそばでしりもちをついたような格好で転がっている。

「小菊！」

刃物のようなもので襲われ、いまにも手すりから落ちそうになった女性を、さっきまでスケッチしていた男が引っ張って助け出した。

「千賀鈴ちゃん！」

さっき助け出され、小菊と呼ばれた女性が、もう一人の名前を呼んだ。

犯人が千賀鈴とよばれた女性に襲いかかる。

「キヤー！ー！」

千賀鈴は何とかよけた。が、そのはずみで手すりから……。

「あぶない！」

新一と平次が同時に彼女の腕をつかんだ。さっきの男がもう片手をつかんだ。

が、千賀鈴は手すりの向こう側、わずかな板にあぶなっかしく立っている状況だった。

「千賀鈴ちゃん！」

小菊が叫んだ。

このままでは危なすぎる。着物姿では手すりを乗り越えられない。

犯人は逃げ出した。とっさに蘭と和葉が飛びかかったが、捕まえることはできなかった。

「宮野！ 黒羽に電話してくれ！」

「あいつのこっちゃん、キッドの衣装を一式もつとるやる。」

「もしもし？ 黒羽君！」

「宮野？ 何の用？」

「キッドのハングレライダー持ってる？」

「一応・・・なんで？」

「清水の舞台から突き落とされそうになった人が！」

「ええっ！」

「工藤君たちががんばってるけど・・・とにかく早く！」

「了解。」

「快斗！ 何してるの！ 荷物はホテルに・・・。」

「青子さん、彼は怪盗キッドですよ。僕たちは先に清水に行かなければ・・・急いで！」

「あつたあ！ やっぱ俺、用意周到・・・じゃなかった。着替え大変じゃん・・・。」

怪盗キッドはハングライダーで空へと飛びあがった。

「はあはあ・・・蘭ちゃん！ みんな！」

「く、黒羽君は？」

「まだ、来てないの。」

バサア・・・

「怪盗キッド！」

観光客が叫んだ。

「黒羽？ 今から手え離すからな。しっかりキャッチせえよ。」

「わたしは黒羽快斗じゃありませんって・・・じゃあ、カウントしますよ。3、2、1！」

「あっ！」

「・・・捕まえた！」

快斗は変装を解いた。

小菊は千賀鈴にすがって泣いていた。

「うちのせいで・・・ほんまに・・・。」

「そんな、ええって。うちもなんやし・・・。」

「なあ・・・あなたは宮川町の!？」

「千賀鈴どす。あんさんは・・・あのときの! 服部平次はんどすやろ?」

「千賀鈴ちゃん、知り合いなんどすか?」

「ええ。こっちは祇園の舞妓の小菊ちゃん。働くところは違うんどすけど、同じ年なんで仲がいいんどす。」

「おおきに。おたのもうします。」

「こっちは、小菊ちゃんの旦那はんの沢木潤一郎はんどす。有名な

日本画家はんですよ。」

「旦那じゃないけど、ね。」

「ほんまにありがとございます。うちは宮川町でお茶屋をやります、山倉たえどす。あんさんは確か探偵はんどすやろ？」

「まあ。こっちは東の高校生探偵、工藤新一。そんでこっちは元祖高校生探偵、白馬探。あれは2代目怪盗キッドの黒羽快斗や。」

「なんなら……。」

「そんな、ええどす。たいした事やないし……。」

「たいした事や。もうこれで何度目やと思ってるの。」

「何かあつたんですか？」

新一が身を乗り出した。

「時間、ありますか？」

「いまは自由時間ですから。」

「なんなら下のお茶屋で話します。沢木はん、狩矢警部に連絡してもらえますか？」

「わかりました。」

清水近くの喫茶店

近くの喫茶店にやってきた。

京都府警の狩矢警部も来た。

「最近、こんな手紙がよってくるんです。」

小菊が紙を見せた。

月×日P・M2:00

三条大橋におまえと千賀鈴が来い。

警察に連絡したらどうなるか分かってるな。

おまえたちが来なかったら、ほかの者を襲う。

「この日はバイクで襲われて……でもこの日、千賀鈴ちゃんはこれへんかったんです。」

「そしたら、うちの先輩の宮川町の市佳代姐さんが襲われたんです。ちよっとしたけがで済んだんですけど。」

「わたしたち警察は大掛かりな警備もできなくて……本当に申し訳ない。」

「ええんです。警部はん。」

新一が聞いた。

「何か心当たりはないんですか？ その一なぜ襲われるのか？」

「それがぜんぜんわからへんのです。」

「小菊ちゃんは事件をいくつも解決しはったから、ねたまれたと違
いますやる？ でも、なんでうちもねらわれるのか……。」

「で、今日なんどすけど……こんな予告状が来とるんどす。」

5月 日 午後8時30分からのお座敷に絶対来い。
来なければほかのものを襲う。

「なんだよこのシンプルすぎる予告状。俺の苦勞は何なんだよ……。」

「このお座敷とは？」

「よくお座敷に来てくれはるお客はんは皆来るんどす。でも、誰の
お座敷なのかわからんです。」

「うちら宮川町の舞妓も呼ばれたんどす。」

「一応前後の時間はとれたんだけど……かなり前から予約してい
たみたいだね。」

沢木の言葉に、狩矢は残念そうに肩をすくめた。

「何か起こるのは目に見えてるな。警察が大掛かりな警備ができな
いなら、俺たちがやるっきゃないだろ。」

「せやな。ただ、その前に・・・隠し撮りはやめてくれへんか、オカン。」

「母さんも。ばれてるぞ、とっくに。」

「ばれてしもうたわ。」

「ほんとね。せつかくいいのがとれたのに。」

工藤優作、有希子夫妻。服部平蔵、静華夫妻。黒羽盗一、千影夫妻。と豪華なメンバーが新一たちのテーブルに寄ってきた。

「おばちゃん！」

「新一のお母さん！」

「話は全部聞かせてもらいましたよ。」

「確かに警察は動けへんわ。」

「困りましたねえ。」

夜の祇園

「おおきに。」

「よろしゅうおたのもうします。」

小菊と、同僚の舞妓の小鈴がしずしずと部屋に入ってきた。

「小菊さんに小鈴さんですね。計画のほうは？」

「バッチリです。」

「うちも小菊ちゃんに教えてもらいましたン。バッチリです。」

「よろしゅうおたのもうします。」

つぎつぎと舞妓や芸妓が入ってきた。

「豆千賀ちゃんに小雪、それに花千代だね。ああ、豆川も来たか。ええと、君は？」

「宮川町の市佳代です。よろしゅうおたのもうします。」

「おおきに。」

「千賀鈴さんですね。」

「これで全員か？」

小五郎が狩矢に聞いた。

「お座敷に呼べた子だけです。」

小五郎は何者かの依頼を受け、京都府警本部に来ていた。舞妓が襲われているので犯人を突き止めてほしいという依頼だった。

そこで偶然狩矢警部と会い、祇園のお茶屋に来ていた。

英理も来ていた。

この場には白鳥警部もいる。

警視庁にウオツカから手紙が来たのだ。

恐ろしい組織がもう一つ日本にある。

今はただの麻薬取引の組織だが、いずれ我々のようになるだろう。

彼らは関西を中心に活動している。

わたしが知っているのはそれだけだ。あとは何も知らない。

そんな警視庁に、赤井秀一やジョディらFBIのメンバーが訪ねてきた。

アメリカで逮捕した麻薬密売人が、日本の組織について話したのだ。彼らは京都の花街で取引すると。かなりヤバい組織だと。

そのために来日し、黒の組織（正式名称は「若手科学者のための科学研究グループ」なのだが。）を倒す際に協力した日本警察をたよって、警視庁に来たのだった。

そして、現在は府警本部で待機しているらしい。

目暮警部らも府警本部で待機している。

「さあさあ、みんないっぺん踊りやす。まだ、時間はありますやろ？」

「ええ。」

「そつどすなあ。」

「ほんなら踊りまひよ。」

「小菊ちゃん。手ぬぐい忘れてしもうた。貸してくれやす。」

「これでええ？ はい。」

芸妓の豆川の言葉に、舞妓たちはそれぞれ立ちあがった。

「ほんなら、最初は祇園小唄でいきます。」

「いやあ、きれいですなあ。」

「お父さん!」

蘭が小五郎を小突いた。

舞妓たちがお茶を注ぎ始めた。(酒はだめなので)

「園子はんは鈴木財閥の人って誰かが言うてましたン。ほんまどすか?」

「そうよ! へへへえ。」

「ほんなら、小鈴ちゃんと同じどすなあ。」

「えっ? なんで?」

和葉が身を乗り出した。

「小菊ちゃん、言ったらあかんやろ？」

「すんまへん・・・小鈴ちゃんは早川宗之助はんの娘なんです。」

「えっ、じゃあ早川さんの祇園にいる娘って・・・。」

「小鈴ちゃんどす。本名は信子やゆうてました。」

「おおき。」

「小鈴ちゃん。すんまへん、言うてしもうた。」

「気にせんでええよ。早川はんはうちを引き取るうとしたんどすけど、舞妓続けたい言うて断ったんどす。」

「もったいなーい。青子だったら早川さんのところに行くなあ。」

「でも、お金を送ってくれたり、お座敷に呼んだりしてくれるんどす。」

「もう時間や。そろそろ行ったほうがええで。 オトン、聞こえとるか？ 2人が出るで。」

「気いつけてな。」

「まっすぐ帰ってきなさい。」

「小菊さん、千賀鈴さん。」

新一が駆け寄った。

「発信器はバッチリどすよ。」

「これも持って行って。探偵バッジ。もしものときはこれで連絡してください。」

「おおきに。」

「大切にします。」

小菊の言葉が一瞬標準語になった。

小菊と千賀鈴は、予定の時刻になっても帰ってこなかった。

四条、河原を走り抜け

「もう30分もたった。おかしくないか？」

「せやな。時間になったらまっすぐ帰るよと言ったんにな。」

「おおきに。よろしゅうおたのもうします。」

「小鈴さん！」

「あれ？ 小菊ちゃんと千賀鈴ちゃんは？」

「一緒じゃないの？」

「ええ。お座敷が伸びてしもつて。けど、小菊ちゃんと千賀鈴ちゃんは時間どおりに出て行きましたよつて。」

「ほかの人は？」

「みんな他のお座敷に行ったりしてはりますけど……。」

「おおきに。」

「市佳代さんどすか？」

「えーと、小鈴ちゃんやね。はよう、帰らなあかんわなあ。あれ？
千賀鈴ちゃんは？」

「いないんどす！」

「父さん！ 母さん！」

「おいつ、オトン！ オカン！」

「親父！ 母さん！」

新一、平次、快斗は同時に電話に手を伸ばした。

彼らは今、問題のお茶屋の目の前の座敷で見張ってるはずだった。

「なあに？ 新ちゃん。」

「小菊さんと千賀鈴さんは？」

「まだ中よ。出てきてないわ。何よ？ 優作。ちよつと……。」

「新一か？」

「父さん。」

「2人は出ていないが、大きなかばんを持った3人組が出てきている。20分前だ。」

「まさか……。」

「そのかばんに詰めていたとしたら……不可能ではない。」

「かばんの大きさは、普通のポストンバッグが少し大きくなったくらいだ。快斗、お前が犯人だったらどうする？」

「入れるな。十分すぎるぜ。ちょっときついけどな。だって着物だろ？」

「せやけどオトン。大の大人、ましてや重たい着物着た舞妓はんやで。持って行くのは大変や。」

「四条通に出てタクシーか車で運ばええ。近いしな。まさかとは思ったんけど……。それに眠らしとけば、楽やろ。」

「工藤！ 発信器使えるか？」

「そうか！……よし、使える！」

「どこですか？」

「くそお。かなり遠くだ……北だ！ 鴨川ぞいで……ひたすら北に向かっている！」

「ほんまや。どれ……なるほど、四条通を通過って、河原町で曲がったんか？」

「服部、バイクは？」

「あるで。かなり近くに止めてある。」

「おまえはバイクで追ってくれ！」

「そんなら、おまえはスケボーか？」

「阿笠博士が改良してくれた。夜でも使えるし、パワーも上がったぜ。」

「なら、俺は・・・青子、すまねえ。白馬、工藤、今は休戦！ わかったな・・・。」

平次と新一が走るなか、怪盗キッドはハングライダーの準備に取り掛かった。

「僕は、府警本部に！ 沢木さん！ 来てください！ 白鳥警部、お願いします。」

探も動き出した。

ブーーーーーン

「服部！」

「工藤か？」

「服部、うしろいいか？ 工藤、どっちだ？」

「なんで、怪盗キッドが俺のバイクにのっとるんや！ はよう、降りろ！」

「北だ！ 川が一つになるあたりだ！」

「了解。あつ、親父！」（うわあ、キッドが二人・・・。）

「白馬君たちは府警本部に着いた。今、応援を連れてこっちに向か
つてるはずだ。」

「工藤君！ 聞こえる？」

「宮野！ 何の用だ？」

「敵は銃を持っているかもしれないわ！ 大人数かもしれない！
気をつけて！」

「わかった。ありがとな・・・つてお前らもいるのかよ！」

「そうよ！ 蘭さんたちも現場に向かっているわ！」

「くそお、信号や！」

「俺はこっちから行く！」

ギギィー

ブー

「このあたりか？」

「でも、わからない・・・どこなんだ？」

鴨川が一つになるところ

時は少し戻る。

「たっだいまー！」

「いっぱい買ってきたぞ。」

「元太君がほとんど買ったちゃいました。あっ、おつりはありませんよ、博士。」

ホテルの一室に、少年探偵団のメンバーが帰ってきた。

「まだ食べるのかい……。」

「夜、ゆっくり食べるだけだし、いいんじゃない？」

「でも、夜食はあんまり良くないからのう。少しじゃぞ。」

「「「はーい……。」」」

「もしもし？ あのー……。」

「探偵バッジ？」

「志保お姉さん？ それとも新一お兄さん？」

「誰ですか？」

「・・・志保お姉さんや新一お兄さんじゃないよ。」

「じゃあ、誰？」

「だあれ？」

「あっ、うちは宮川町で舞妓やってます、千賀鈴どす。」

「千賀鈴さん！」

「僕たち、少年探偵団です。覚えてますか？」

「ええ。」

「どうして千賀鈴さんが探偵バッジを持ってんだよ？」

「工藤君のを借りたんどす。けど事件に巻き込まれてしもって・・・」

「」「事件!?!?!」

「あー、わしは阿笠です。」

「阿笠さん!?!? あのお、工藤君たちと話せますか?」

「ちょっと待っててください。」

「どこなんだ！」

ブルルルル・・・

「博士？」

「新一か？ 今、探偵バッジに千賀鈴さんから連絡が来てのう。何かあったんか？」

「すぐつないで！　もしもし！」

「千賀鈴どす。お座敷を出たところで黒い服の人につかまってしもうて・・・。」

「けがは？」

「大丈夫どす。地下室にいます。けど、着物脱がされて髪もほどか

されてしまつて。普通の服装にされてしまつたんです。」

「なんだつて？」

「ええ………あつ！」

『なにしてたんや！』

「何にも……。」

『嘘つくな！ どれどれ……なんやこのバッジ。通信機能がついとるわ……だれと話してた!?!?』

「何もしてまへん。あつ、小菊ちゃん！」

「誰か知らんけどな。この二人は連れてくで。」

「工藤……。」

ギギイーーーー

「工藤君！ 服部君！ 黒羽君！」

「小菊さんと千賀鈴さんは？」

車から、目暮警部や探が降りてきた。

「探偵バッジもばれた。どこかに連れて行かれてしまった。」

「そうではなさそうですね、東の高校生探偵さん。」

「えっ……。」

「見てください。あの窓を。」

川の向こうのビルの窓ガラスが光った。

明かりのつき方が妙だった。

「懐中電灯や！ 電球やないで！」

「行くぞ！」

だが、ビルには誰もいなかった。

地下室も、無人だった。

きれいにたたまれた着物や持ち物が、地下室の真ん中に置かれているだけだった。

「これは・・・千賀鈴さんと小菊さんの。」

「くそぉ！ 探偵バッジだ。」

新一が悔しそうにバッジをたたきつけた。

「工藤君、あれ！」

「宮野？ なんだ？・・・携帯電話？」

「犯人のとちやうか？」

「電話番号は・・・連絡先は一つだけだ。」

ピュピュ・・・

「メールだ！」

「なんやて？」

まさか君たちが来るとは思わなかったよ、高校生のみなさん。

探偵さんに怪盗さん。探偵の娘さんに刑事の娘さん。財閥の御令嬢、黒の組織の科学者さん。

すばらしい。

でも、ゲームは終わりだ。命がかかっているからね。

舞妓を二人預かっている。
返してほしければ、明日、我々の指示に従え。
まずは清水寺だ。地主神社にいけ。
そこで連絡を入れろ。
謎が解けたら、次のヒントを出そう。
時間がかかれば、舞妓は死ぬ。

「明日は、班行動だぜ。」

「ほんなら、行くしかないやろ。」

「清水ですか……。」

「工藤君、君たちが行くのかね？」

「ええ。」

「ホテルに戻ろう。FBIから話があった。」

祇園のビジネスホテル

「あれ、警察官だろ？ ヤバくね。」

「あの外人だれ？」

「FBIらしいよ。こわっ！」

「その隣にいるの、白馬探の親だつて。警視総監だから・・・警視庁のトップ。」

「おおお。でも、あれは大阪府警のトップ、服部本部長だろ。」

「お前ら、部屋に戻ったらどうだ？ いろいろ話したり、おやつを食べなくてもいいのか？」

「いやですよ、先生。」

「なんかすごそうじゃん。」

ホテルのロビーに、目暮警部をはじめとする警視庁捜査一課のメンバーと白馬総監、狩矢警部や綾小路警部ら京都府警捜査一課のメンバー、大阪府警の大滝警部と服部本部長、といった警察関係者、ジヨデイや赤井らFBIのメンバー、本堂瑛佑（CIAから特別に派遣された。）達CIAのメンバー、盗一らインターポールのメンバーも集まった。優作や有希子たちもしかり。エレーナも来ていた。

少年探偵団の3人もいた。阿笠博士と一緒に京都に来ていたのだ。

もちろん、新一や蘭たちも参加している。（彼ら高校生のために、ホテルで会議をすることになっていた。）

その周りには、噂を聞きつけた江古田高校と帝丹高校の生徒がズラリと集まっている。

「・・・と、まあこんな感じだ。」

「ってことは、赤井さん。まさか、この間の組織みたいに・・・。」

「そうかもしれないな。考えていた以上に危険な連中だそうだ。」

「あの、ウォツカが警告するくらいですもの。わたしも噂を聞いたことあるし。」

「志保サン、それ本当なの？」

「少し、ね。わたしは研究部門だったし、詳しくは分からなかったけど・・・麻薬の密売に関して言えば世界一、最近は殺しにも手を出すって。最近って言うっても、何年も前の話しだけど。」

「わたしも聞いたことがあります。シャロンが報告してくれたわ。」

「わたしからの報告をしてもいいですか？」

白馬総監が手を挙げた。

「詳しく調べた結果、その麻薬組織とある事件がつながりました。」

「まさか、それは小菊が関わった!？」

沢木があっ、と叫んで言った。

「ええ、舞妓が2人殺され、小菊さん、まあ小鈴さんの身代わりでしたが、が襲われた事件です。犯人は杉野次郎。早川財閥の秘書です。彼は、早川氏の娘を見つけ出したことでとりたてられていたのですが、その娘は偽物だったそうです。ところが、本物らしい小鈴が現れたため、殺そうとしたそうなんです。……名前や顔がはっきりしていなかったらしく、無関係な小静さんと、観光舞妓の小千津さんが犠牲になってしまいました。」

「あの事件のとき、小菊が推理をして、犯人逮捕に協力したんです。」

「じゃあ、犯人は恨んでいますな。小菊さんを。」

小五郎が自信たっぷりと言った。

「アホ。犯人は捕まってるんや。」

「たしか、今は刑務所に服役中よ。」

平次と英理がつっこんだ。妙に息が合っている。

「白馬警視總監。犯人の杉野に仲間はいたんですか？」

「分かっているんだ。でも、杉野は麻薬組織とつながっていた。どうやら早川財閥の金を使おうとしたらしいんだが……。」

「とにかく、みんな注意するんだな。」

「じゃあ、もう一度確認します。Cool guyたちは千賀鈴サ
ンと小菊サンを助けるため、犯人の指示に従ってください。もしも
のときは連絡して。」

「……はい。」

「警察の皆さんは京都各地の警備、先ほどの説明通りです。細かい
ことは、警視總監、本部長、よろしくお願いします。毛利サンもこ
こね。FBIとCIA、インターポールの皆サンは麻薬組織を倒す
ための作戦をもう一度詳しく立てますから、この後府警本部に移動
しましょう。本堂君はここに残って。詳しいことはまた連絡します。
阿笠さんは沢木さんと祇園で待機しててください。小菊サンと千
賀鈴サンが見つかったら、保護をお願いします。」

「わかった。」

「それから……先生！」

「はっ、はい！」

「この子たち……少年探偵団の子たちをよろしくお願いします。」

「わかりました！　じゃあ、みんな。明日はおじさんと京都見物だ
！」

「……はい……。」

「なんか、こないだの組織倒した時みたいやなあ。」

平次がぼそつと呟いた。

507号室　メンバー・工藤、服部、黒羽、白馬

「工藤、風呂入ったでえ。今、テレビ何やってる？　おおっ、このドラマ刑事ものやないか！」

「犯人誰かわかったか？」

「・・・分かったでえ、この・・・。」

「」「藤田。」「」

「怖えー。探偵と刑事ものは見れないな。」

「黒羽、この宝石はどうやって盗んだんか？　ちよい分からん。」

「ワイヤー使って部屋に入ったな。さっき傷があった。あんまり腕が良くないなあ。」

「さすがやなあ。」

新一、平次、快斗、探は同室になった。

平次の両親が部屋をとったので、急遽新一たちの部屋割りが変わってしまった。

「杉野次郎か・・・なるほど・・・。」

「そうゆうじゃない。」

「ええ、彼には・・・お兄さんがいますね。」

「たぶん。」

「なんで分かるんだよ。」

「名前、ですよ。」

「黒羽、おまえなら一番初めの男の子になんて名前を付ける？」

「うーん、一郎とか太郎とかキッドとか・・・あっ冗談ね、冗談。」

「次郎とは付けないでしょう、ということですよ。」

「そうか！ 次郎の次は二番目って意味だしな、そうだろ？ 服部

平次君。君の名前は平次、常に二番目、ぶふふ。」

「黒羽！ こいつ！」

「ホテルで暴れんな。」

「壊したら、弁償ですよ。」

ドンドン・・・

「はい！」

ガチャ・・・

「探？」

「父さん。何かわかったの？」

「杉野次郎についてはかなり、な。」

「白馬警視總監、どんな結果でしたか？」

「杉野次郎は東京出身、両親は彼が20歳のときに亡くなったそう
だ。両親はちよつとヤバい人たちだったみたいだ。交通事故に巻き
込まれ、乗っていた車は全焼。2人とも白骨となっていたそうだよ。
だが、シートから銃弾が見つかったね。ほかに、銃やピストルが
車から発見されたよ。誰かと撃ち合いをしていたのは間違いないん
だが、そのことがわかったのは事故から2年後。そのころには、彼
らの息子たちは行方不明になっていたそうだ。」

「息子たち？」

「杉野次郎には兄がいたよ・・・お前たちの推理通りだった。杉野
太一という奴だ。弟の次郎は数年後、早川氏の秘書として突如現れ

だが、太一はどこで何をしているのかさっぱり。」

「じゃあ、あやしいのは杉野太一？」

「決めつけるのは早いね。杉野太一は祇園にも姿を現してない。彼がどうやって祇園の情報を手に入れたのかが分からない。それに、奴が生きているのかどうか……。」

「容疑者はほかに……？」

「まずは杉野次郎がつれてきた偽物の早川氏の娘。彼女は偽物だとわかった後も、早川氏と裕福な生活をしている。自らの幸福のため、または金を巻き上げるために早川氏に近づいた可能性もある。」

「早川氏ってこともあるんとちゃうか？ 被害者のふりして麻薬組織とつながり、金を稼ごうとしたかもしれんやろ？」

「小鈴さんの可能性もあるんじゃないか？ ほら、名乗らなかつたけど、実は麻薬組織と取引して……とか？」

「それはないな、黒羽。」

「小鈴さんはお座敷にずーっとおったんや。先に出た小菊さんや干賀鈴さんをどうやって襲うんや。」

「共犯者がいるのは間違いない。おそらく麻薬組織がらみだ。」

白馬警視總監が出て行ったあと、コンコンとドアをたたく者がいた。

「くんばんは。」

「本堂！」

「麻薬組織についてですが・・・相当ヤバい組織で、今はたぶん、黒の組織と同じくらいの規模だろうと・・・。」

「マジで・・・。」

「それと、黒羽君が追っていた窃盗団の残党がいたみたいで・・・スネイクでしたっけ？」

「スネイク・・・。」

「奴がまだ生きているみたいなんです。」

「嘘だろ・・・奴は殺したはずなのに！」

バンバンバン……

ズカン！

バババババン！

「テヤーっ！……銃、もろつとくで。」

「服部、銃も持つとけよ。刀だけで戦える相手じゃない！」

「わかってるで工藤。ほれ、見てみい。回収品やけど、もうこんな
に集めたで。」

カシャ……

「ふっ。」

「あぶない！よけろお！」

ズカン！

「黒羽、ありがとう。」

「おかげで助かったで、って黒羽？」

「お前は・・・怪盗キッドか。」

「スネイク・・・。お前らもこの組織の一員だったのか。」

「一員じゃあない。手を組んだだけだ。お前も手を組んでいたとは、探偵と。」

「仲間に変わりはない。」

「おやおや、おもちゃみたいな銃を出しちゃって。お前に人が殺せるのか？」

「俺は怪盗だ。強盗じゃない。でも、お前は別だ！」

「黒羽！」

「シュパーン！ シュパーン！」

「そんなトランプで殺せるわけがない・・・お前もお・・・。」

「服部、銃を貸してくれ。トランプ銃によく似ている奴を。早く！」

「えっ、なんやて？ もっとはつきり話せや。」

「しーっ。早く！」

「……いや、違うな。お前は父親ほど運が良くない。おやおや、またおもちゃを出して……ははははははっ。」

ズカ ン！

「うっ……。」

「お前専用のトランプ銃だ！ いや、ただの銃だな。」

あの戦いでスネイクは快斗に撃たれ、ジンのようにビルから落ち、死んだはずだった。

が、生きていたというのだ。

「窃盗団を立て直すため、麻薬組織と手を組んだんでしょっ。」

「マジかよ……。」

「これは、インターポールからです。あとで、志保さんにも渡しておきます。」

小型でも十分使える銃だった。

「奴らは本当に危険なんだそうです。」

603号室 遠山、中森、宮野

「園子、そろそろ……。」

「まだまだあ！ なんてったって、今日は特別給付金による江古田高・帝丹高合同宿泊研修京都豪華旅行バージョンなんだから。」

「ごめんね、志保ちゃん、青子ちゃん、和葉ちゃん。」

「気にしなくてええよ、蘭ちゃん。」

「青子も楽しいもん。」

「ええ。あら、もうないわ。」

「ほんまや。あんなにおやつあったんになあ。ほな、買ってこよか？」

「いいよ和葉ちゃん！ 太っちゃうじゃない！」

「園子……。」

蘭と園子、和葉と青子と志保がそれぞれ同室になった。

蘭と園子が志保たちの部屋に来てもう1時間は立つ。

コンコン……

「やばっ、先生かも……。」

「ええっ、どないしよう?」

「大丈夫よ。まだ時間じゃないわ。」

「どうぞー!」

「あっ、あんた、あのドジっ子じゃない。」

「本堂君、どうしたの?」

「麻薬組織、かなりヤバいみたいで……志保さん?」

「何?」

「インターポールからです。」

「なんやこれ! 銃やん!」

「本堂君……。」

「志保さんは銃が使えるから、持っていないよりはましだと思って。」

「まあいいわ。ありがとう。」

「さすがに、もう寝よう。」

「まだまだ！ なんたってたって……。」

「明日は人質の命をかけた究極の班行動なんだから、寝たほうがいいわ。」

「そっやね。」

「じゃあ、寝ようか。」

「おやすみー！ ほら、園子！」

ガチャ……

「ねえ蘭。」

「なあに？」

「もし、明日、なにか起こったら・・・どうしよう。」

「園子？」

「なんか怖くて・・・あのときみたいに・・・ほら・・・あの・・・刃物押しつけられて・・・。」

「大丈夫よ。あの時は、シャロンでしょ。わたしたちを助けためだったんだし。」

「そう？」

「大丈夫だって。ふあああ。お休み！ 園子！」

「おやすみ・・・蘭。」

on タクシー

「ふあああ。」

「宮野。お前ちゃんと寝たのか？」

「寝たわよ。」

「うそついちゃあかんよ、志保ちゃん。ずっと計算式つくってたやろ？」

「計算？」

「そうよ。麻薬組織について。」

「怖……。」

「おい工藤！」

「はい。」

「タクシー準備できてるぞ。」

「ありがとうございます。」

「気をつけるよ。一応、ホテル集合が5時30分だ。何かあったら連絡してくれ。」

「分かりました。」

新一、快斗、探が小型タクシーに、蘭、園子、和葉、青子、志保が
中型タクシーに乗り込んだ。

平次はバイクに乗っている。

運転士も事情は知っている。

「まずは清水へお願いします。」

清水寺は広いです

地主神社に着いた。

証拠も送る。

ピッ

ブルルルル・・・

証拠のすばらしい写真をありがとう。

では、ヒントを出そう。

やさしき神の社で

緑を出して、軽いのに願いをかなえてくれる物を手に入れる。

解けたら次のヒントを出す。

「やさしき神の社は地主神社で間違いないな。」

「でも、なんででしょう？ 緑を出して軽いのに願いをかなえてくれる物・・・。」

「ほな、行こか？」

新一たちは、地主神社中を捜しまわったが、それらしいものはなかった。

探に至っては、暗号かも、とノートにごちゃごちゃ書いている。

人が増えてきてしまい、これ以上探すのは大変だった。

「一旦出よう。人が増えてきた。」

「ちょっと園子！ 何してるの？ 早く早く！」

「ああ、蘭。先行つてて。」

「はい、蘭。」

「園子、どこ行ってたの？……って何これ？」

「全員分あるから。タダでもらえるのよ。もうほんとラッキー！」

「本当にラッキーだぜ！」

「え、何？ 黒羽君。」

「軽いのに願いをかなえるもの……これだよ！ 紙の小槌だ！」

「園子！ お前これどうやって!?!？」

「……これよ！ これ！ 京都修学旅行パスポート。これがあれば、いろんなサービスを受けられるのよ。」

「緑・・・これだ！」

「これのことだろ？
証拠写真も送る。」

ピッ

ブルルルル・・・

あたり。さすが、よく解けたね。
次も清水のなかだ。
北の英雄をさがせ。

「北の英雄？」

「ローマ字に直すと、KITANOEIYUU？」

「さっぱりわかんねえ。」

「もっと複雑なんとちゃうか？」

「うーん。」

「アテルイとちゃう？」

「アテルイ？ 和葉、なんやそれ？」

「平次、ちゃんと授業聞いてなかったやろ？」

「て、てめえ……。」

「そっか、事件事件ゆうておらんかったんか。アテルイは蝦夷の人や。朝廷と戦ったんけど、負けてしもうてなあ。アテルイは確か殺されてしまっくんやけど……そのアテルイとモレの石碑が確か清水寺にあるんや！」

「それって、『北天の雄 阿弓流馬 母禮之碑』って書いてあるあの石碑か？」

「そっや！」

「なんならこっちや！ 行くで！」

北の英雄とは、アテルイとモレのこと。

そうだろ？

証拠も送る。

ピッ

ブルルルル……

あたり。さすがだ。

次は白峯神宮だ。

工藤君なら楽しめるだろう。

「運転士さん！」

「おお、帰ってきましたか。ほんなら・・・。」

「白峰、白峰神宮に行ってください！」

京都のコンビニはなかなかですが

「コンビニ？」

「そつちや！ 一つ飯食えるかわからんのやら、今のうち「買ったくべきやろ？」」

「そつちか・・・服部？」

平次のせいで、鴨川も渡らないうちからお昼となった。

一行は、コンビニでおにぎりやサンドイッチを買った。

「京都来てコンビニか・・・。」

「君、もしかして、服部平次君？」

「せやけど・・・もしかして、水尾さん？」

「水尾さんって、あのときの！？」

「君は工藤新一君か。なんか事件でもあったんか？」

「今日は学校の宿泊研修だったんですけど・・・。」

「そつちか、なんか警察に呼ばれるしなあ。なんかあったんかな思つて。」

「警察に!?!」

「昨日、祇園でなんかあったらしいな。僕は先斗町で飲んでたんやけど……。なんか知ってるか?」

「千賀鈴さんと小菊さんが連れ去られてしまったんです。」

「ほんまか? じゃあ、それで……。」

「失礼やけど、なんで呼ばれたんか? あんたは先斗町にいたんやろ?」

「知らんけど……僕は千賀鈴さんをよく呼ぶんや。なんかいい子やし……。」

「そつか……。」

「水尾さん、なぜ千賀鈴さんが狙われるのかわかりますか?」

「……思いつきませんなあ。」

「そうですか……。」

「じゃあ、急いでるんでな。気いつけてな。」

水尾さんの後ろ姿はどこか悲しげだった。

白峰は球技の神様

「白峰神宮かあ。」

「球技の神様やで。」

白峰に着いた。
証拠も送る。

ピッ

ブルルルル・・・

もうヒントは出している。
証拠は映像にしてくれ。

「はあ!?!」

「ヒント無し!?!」

「白峰・・・なんやろ?」

「球技の神様、か・・・。」

「これ、新一がサッカーをしるって意味じゃない？」

「えっ!?!」

「工藤君が楽しめる・・・確かに工藤君ならサッカーで楽しめるけど。」

「ここは蹴鞠・・・サッカーみたいなことするんでしょ？」

「そっか、さすがやな、毛利の姉ちゃん。」

「へへへ。」

「よしっ。工藤、早くサッカーやれよ。ボールはその辺の使って・・・俺が撮ってやる。」

「わかったよ。それっ!」

「さすがやねえ、工藤君。」

「ほんと。快斗がバカみたい。」

「うるせえ、青子!」

「うるせえっ!」

「あっ、いや。。。」

工藤ががんばったで。
映像つきや。

ピッ

プルルルル・・・

正解。なかなかだね。
次は、北野天満宮だ。

受験生が集まる場所

北野天満宮ついた〜！
俺ら受験だしなあ
で、なに？

ピッ

「おい、黒羽。変なメール送るな。」

「いいじゃん。」

プルルル・・・

人の命がかかっていることをお忘れなく。
ヒントを出そう。
悲しみの牛を探せ。

「悲しみの牛？」

「牛っていったって・・・ここにはギョーサンいるぞ。」

「菅原道真が祭られているからな。」

新一たちはなすすべもなく、ぼんやりしていた。
とりあえず飲み物を買って、飲みながら考えた。

「お守り買わなきゃ！」

「写真撮ろっよー！」

「おっ、あれ修学旅行生じゃねえ？」

「いかにも中学生、受験生ですってとこやな。」

「あなたたちもお参りしてきたら？　一応受験生だし。」

「そっいえば、志保ちゃん。志保ちゃんはどこ受けるの？」

「さあ？　まだはつきりとは決めてないわ。」

「志保ちゃんなら、外国の学校に行けるんちゃう？」

「もう、海外の学校はうんざり・・・でも、考えてはいるわ。」

「えーなあ。うちは地元の大阪か京都の大学を考えてるんやけど・・・
ちょっと厳しいわ。」

「和葉ちゃんなら大丈夫よ。あたしはまだ決めてないけど、就職なら楽だし。」

「園子ちゃんは鈴木財閥に就職すればいいしね。青子もまだ決めてないんだ。でも、警察とかもいいなーって。」

「警視庁の2課？」

「うん。キッドを捕まえたくて。」

「わたしは、まだはつきりとは決めてないんだけど・・・お母さんみたいな弁護士とかもいいなって思ってるんだ・・・。なんか、中学のころに戻ったみたい。」

「ほんまや。うち、平次と同じ高校行けるように、ここにお参りに何度もきたわ。」

「青子も。修学旅行のとき、一生懸命お参りしたなあ。」

「あたしたちはそのまま入学できたから。」

「園子！　ねえ、お参りしない？」

「ええよー！」

「うん、行くー！　快斗！　お参りしようよ。」

本殿の近くは中学生でこつた返していた。

「この牛は、下から見ると・・・ほら、このように泣いてるよ
うに見えるのです。」

「へえー、知らなかった。」

ガイドの言葉に新一たちは目を見開いた。

「ほんまや。泣いとる、泣いとるでー!」

「悲しみの・・・牛。」

牛も泣くなんて

菅原道真の左遷は本当に

悲しいことだったんだな。

証拠も送るぜ!

ピッ

プルルルル・・・

正解。少し時間がかかったね。

次は鹿苑寺、金閣寺だ。

たぶん、おいしいものを食べる
時間があるだろう。

金で輝く金閣

「人、ギョーサンおつてなかなか進まんわ。」

「とりあえず、そこに並んで。」

金閣寺に着きましたよ。

人も多くて、大変ですね。

ピッ

プルルルル・・・

ならば、ヒントを出そう。

クラスの担任の先生にぴったりの
ものを探してくれ。ここにあるか
は知らんが。

この先生は中学3年生の担任、
修学旅行でここに来た。

なにか思い出しにして、写真に残し、
クラスに掲示して受験の励みにした
いそうだ。

この先生には、何をプレゼントした
らしい？

「えらい長い文章やなあ。」

「推理のカギは……。」

「中学3年生の担任の先生。」

「修学旅行で来て、思い出にして、写真に残し、クラスに掲示できるもので。」

「でも、ここにあるとは限らない……そうゆうことかな？」

「そうだな……ちょっと引つかかるが。」

「そつやな。」

「おいおい、どういふことだよ。」

「探偵にしか分からないんですよ、月下の奇術師さん。」

「こんなところでウジウジしててもあかんやん、平次。うちらも手伝うで。」

「なら、こうしましょう。わたしたち女子と男子、とにかくいくつかに分かれて探すべきだと思うわ。」

「でも志保ちゃん、何を探せばいいの？」

「さあ？ 探偵さんに聞いて。」

「んなこと言われても、こっちもわかんねえ。」

「……………」

「誰や？……工藤やないか？」

「ああ……もしもし？」

「新ちゃん？」

「げっ。」

「何よ、その態度。そっちはどう？」

「金閣寺だよ。行き詰ってんだ。」

「あら、まったくの正反対。わたしたちは今、二条城にいるの。」

「えっ？」

「観光よ観光。ヒマだから、静華さんに案内してもらってるの。それだねえ、二条城で撮影やってて、急遽参加することになったの。」

「おいおい・・・人の命がかかってんだぞ・・・。」

「ちゃんと協力してるわよ！ なら、証拠を送るから。ふふふ。」

ピロロロロ・・・

「まったく・・・。」

何枚かの写真が送られてきた。

「なんだよ・・・着物着て・・・おいおい、なんの撮影だよ・・・父さんも乗ってんじゃねえ・・・。」

「オカンもオトンも何してん！」

「まさか僕の父まで？」

「いや、大丈夫そうだが、白馬。お前の親父は・・・おいおい、父さんも何してんだよ・・・。」

「ん？ 写真が変わった。」

「どっかの神社やなあ。」

「ほんまや。たぶんこは・・・八坂神社とちゃう？」

「新一、これ！」

絵馬だった。写真いっぱい映った絵馬には、新一たちの名前とともに、事件が解決しますように、と書かれていた。

「母さん……。」

「これじゃない？」

「何だよ青子。耳元で大きな声だすな。」

「だって、これのことじゃない？ 絵馬……ほら快斗。青子たちの先生も絵馬にクラスのみんなの名前書いて、北野天満宮に納めてくれたじゃん！」

「そっか……絵馬か！」

新一たちは絵馬を探した。

が、見つからなかった。

売店でアイスを食べながら、途方に暮れていた。

「さてよ……これが答えなんじゃないか？」

「何言ってるんだよ、黒羽……。」

「ここにあるとは知らんがな、だろ？」

「そつや！ そつだったんか！」

「おい、服部！」

金閣寺に絵馬はない。
そつやろ？

ピッ

プルルルル……

正解。少し時間がかかったようだね。
次は龍安寺だ。
これでラストだ。

石の庭

龍安寺に着いた。

ピッ

ブルルルル・・・

では、ヒントを出そう。
十五の石を一気に見る。

「十五の石？」

「ロックガーデンですよ。この中です。でも、不可能ですよ。」

「しゅちゅしゅちゅしゅちゅるるいんだよ、白馬。」

「ほな、行こかー。」

「ほんとにロックガーデンだな。これのどこがいいんだか。」

「黒羽君には一生分からないと思いますよ。しかし・・・困りまし

たね。ここの庭園の石・・・全部で15個なんですけど、一度に見れないので有名なんですよ。」

「それでなんやけど・・・。」

「わかった！ 入口のところにあった、目の見えない人用の模型じゃねえ？ ははっ、俺天才！」

「ちょ、黒羽、待てや！ 十五の石はそれとちゃう！」

携帯に打ち込みながら、駆け出していた快斗はぴたりと動きを止めた。

新一が平次を小突いた。

平次の隣には、和葉が得意げに立っている。

「どづいうことだ？ 服部。ここの庭園は15個の石が全部見えな
いんだろ？」

「でも、一か所だけ、15個の石が全部見れるところがあるんや。」

「うちの親戚の家に平次と行ったときになあ、教えてもらったんよ。」

「ここやで。」

「ここに立って、よく見てみい。」

「1 / 2 / 3 / 4 / 5 / 6 / 7 / 8 / 9 / 10 / ...
1 1 / 1 2 / ... / 1 3 / 1 4 / 1 5 ! 本当だ! 見えるよ、和
葉ちゃん。」

「な?」
「このことやる?」

「本当だ!」
「15個あるよ。」

「さすが、和葉ちゃん。京都詳しいね。」

ここに立てば、すべて見える。
証拠も送る。

ピッ

ブルルルル...

正解。

では、2人の居場所を教えよう。
月渡る橋に。
早くしないと、死んでしまうよ。
温もりが消えてしまうよ。

「月渡る橋……。」

「……渡月橋！」

「よっしゃ！いくでー！」

「ここから、嵐山は近い！ラッキーだな。」

石の庭（後書き）

本当に、龍安寺の15個の石は見えるんです！

月渡る橋に

ブーン

「渡月橋や！」

「きれいな橋……。」

「本当！　きれい！」

新一たちはタクシーから降り（平次はバイクから降り）、渡月橋のあたりをうろついた。

すこし、暑かった。でも、なぜか空気は冷え冷えとしていた。

「どこにいるのかな？」

「だいぶ探したのに、いないわね。工藤君、本当にあってるの？」

「あってるに決まってるだろう？」

「おい！　あれ見ろよ！」

「なんや？　黒羽。」

「あれ・・・小菊さんと千賀鈴さんじゃないか？」

「・・・本当だ！」

「行きましょう！」

「和葉！ お前らはどっかから毛布とかタオルとかもらっただけいっや
！」

「わかったで！ 蘭ちゃん、青子ちゃん！」

「あのお店から借りられるかしら？ 蘭、どう思う？」

「たぶん。」

新一たちは、ざぶざぶと川の中に入っていこうとした。が、流れが激しく、橋げたまで届かない。

そう、千賀鈴と小菊は、渡月橋の橋げたに縛り付けられていた。

体の半分近くが水につかっけていて、全身びしょ濡れなのが遠くからもわかった。

「無理だ。黒羽、お前ハングライダー持ってるか？」

「一応・・・って、無理だって。危険すぎる。」

「命がかかってるのよ、黒羽君！ どれくらい水につかっていたの

かわからいけど・・・危険な状態よ。」

「わかった。できるところまでやってみる。」

怪盗キッド、いや快斗はハングライダーで橋げたに近づいた。

何度も水につかりながら、2人をつかんで、よたよたと飛び始めた。

新一や平次、探が水の中に入り、なんとか受け止めた。

志保が2人の脈を見た。

「千賀鈴さん？ 小菊さん？」

「新一！」

「平次、毛布とタオル・・・着替えはまだやけど、持ってきたで！」

「おお、サンキューな。」

「千賀鈴さん？ 小菊さん？」

「ゴホツ……。」

「はあはあ……。」

「千賀鈴さん！ 小菊さん！」

「大丈夫ですか？」

千賀鈴と小菊が意識を取り戻した。

小菊は、とつさに起きて、新一たちの顔を見回した。

「小鈴ちゃんは？」

「えっ？」

「小鈴ちゃんはどこですか？」

「たぶん、祇園に……。」

「祇園に警備の方は……うそでしょ……。」

「どうかしたのですか？」

「犯人の狙いはわたしたちじゃなかったんです。小鈴ちゃんだったんです。」

コナンや哀がいなくても

時は少し戻る。

少年探偵団のメンバーは、帝丹高校と江古田高校の先生と京都をまわっていた。

有名どころをまわり、みんな満足していた。

「志保お姉さんって、高校でどう?」

「灰原のときも、なんか怖かったよな。」

「宮野か・・・頭はいいんだが、友達をほとんど作らないんだ。毛利や鈴木たちといえることもあるが・・・ほとんど一人だな。」

「そっなんだ・・・。」

「でも、頭はいいぞ。理数系にいたっては工藤より上だ。」

「新一さんもすごいんですか?」

「まあな。でも、事件だ事件だつてすぐ抜ける。これじゃあ推薦は無理だな。」

「うちもそうですよ。黒羽は成績はすごくいいんですが、しょっちゅういたずらをしましてね。授業態度は最悪です。」

「しかたありませんよ。彼は月下の奇術師ですから。」

「ええ。でも頭もいいし……どうしようもなくて。」

一行は京都駅のおいしいラーメン屋さんでお昼を食べ、ビルから出た時だった。

向かいのビルから、ざわめきが聞こえた。

「あつ、あれ！」

「ちょっと、失礼します！」

少年探偵団は、あわててかけよった。

「きゃああああ！」

かれらの目の前に、血だらけの男が落ちてきた。

すぐそばにいた女性が悲鳴を上げた。

「だめです、もう死んでいます！」

「ラーメン食べて、駅を出て……死体が落ちたのは今から5分前

つてとこだな。」

「先生、警察の人は？」

「呼び終わったけど・・・どれくらいかかるかなあ。」

「そっか・・・じゃあ、ビルからぜーったい人を出さないようにお願ひします。」

「ああ、わかった。」

「うーん、殺されたのは・・・。」

「あつたぜ、名刺だ。」

「でも、名刺がたくさんあるよ。」

「なんだ？ おっ、携帯だ。へへっ、殺されたのは・・・!!!」

「何ですか、元太君。」

「き、消えちゃった・・・ほら、見てみるよ。」

「本当だ。データが・・・。」

「ウイルスでしょうか・・・でも、消えたのは少しだけですよ。」

「じゃあ、誰かわかるね。」

「でも、その部分のデータが消えてしまっています。」

「じゃあ、分かんないじゃないかよお。」

「メールは？ メールに書いてあるかもよ!」

「そっか・・・さすがですね、歩美ちゃん。」

「これですかね。」

天智から高倉へ

鞠をつきながら23

玄関の前

十条、八条に面している倉庫

1:00

高倉から天智へ

勅使は来た。

詔に従う。

「なんだろう？ 天智・・・高倉？」

「次のメールを見ようぜ！」

後醍醐から高倉へ

気をつける！

詔に従うな

何があっても、だ。

高倉から後醍醐へ

わかった、ありがとう。

でも詔には従わなければならぬ。

「詔？」

「次を見ましょう。」

後醍醐から高倉へ

さつき、毒を盛られた。

危険だ、気をつける。

高倉から後醍醐へ

わかった。

そっちも気をつけるよ。

後醍醐から高倉へ

やはりあの名刺に天智の名が！

ミスもばれた。

気をつけろ、消されるぞ。

高倉から後醍醐へ

やはりそうか。

大丈夫だ。

持統から連絡があつた。

彼女が言うには、この任務を

成功させれば許してくださるそうだ。

後醍醐から高倉へ

持統を信じるのか？

あいつは裏切り者だぞ。

高倉から後醍醐へ

天智の娘だろ？持統は。

大丈夫だ。

裏切っても殺されていない。

親子なんだ。大丈夫。

「高倉・・・後醍醐・・・天智に持統・・・わかりました！これはコードネーム、天皇の名前ですよ！」

「天皇とくると、日本史担当の俺の出番だな？ どれどれ、詔？」

「なんですか？ 先生。」

「詔は天皇の命令のことだよ。ただ、天智天皇のものしか詔ではないのか？ どれも天皇ではないか？」

「天智天皇はえらいのか？」

「うーん、でもこの中では一番古い天皇だね。」

「じゃあ、持統天皇は天智天皇の娘なの？」

「そうだよ。持統天皇は天智天皇の娘で天武天皇の奥さんだ。」

「へえ、そうなんだ。」

少年探偵団は事件について調べ始めた。

そう、かつて新一や志保がやっていたように。

「十条・・・これって十階って意味じゃないか？」

「八条に面する・・・これはそのまま、八条通りに面したところって意味だね。」

「倉庫・・・あの窓ですかね。」

「被害者は刺された後、そのまま落ちたんだね。でも・・・そっか、おとされたんだ！」

「ちょっと待って、刺されたのはここだけなのに、足や手にまで血がべったりついていきますよ。」

「じゃあ、まさか・・・もう一人？」

彼らは十階まで駆け上がった。

通りに面した倉庫のドアを蹴破った。

倉庫は血だらけで、もう一人男が倒れていた。

血まみれで、今にも死にそうだった。

「先生！ 警察と救急車を！」

「わかった。」

「いいです……。」

「話さないでください！ もうすぐ救急車が来ます！」

「元太君！ 支えてあげて！ もう大丈夫だよ。」

「この角度でいいか？」

「もう……俺は死んでしまう……高倉……は？」

「下に落ちて亡くなりました。」

「そう……か……あいつの胸にナイフが刺さってただろ？ あれは……おれが……やった。」

「話さないでください！ そういうことは警察で話して！」

「もたない……ありがとう、お嬢さん……君たちは……工藤君たちの知り合い？」

「そうだけ。俺ら、少年探偵団。おっちゃん、もうすぐだからな。」

「なら、麻薬組織を追っているのか？」

「そうです。新一さんたちは千賀鈴さんや小菊さんを助けるために……。」

「伝えてほしい。組織のメンバーは……歴代の天皇の名で呼び合う……俺は後醍醐……あいつは高倉だ。メールは……見たのか？」

後醍醐は、光彦が持っていた携帯電話をちらつと見た。

「見ました。天智と・・・持統ですよ。」

「持統は・・・あいつは・・・天智の娘だ・・・早川氏に偽物だが引き取られ・・・でも・・・あいつはばれた・・・本当なら、早川氏から逃げてこなきゃならなかった。でも、あいつは・・・早川に引き取られてな、ぬくぬくと贅沢な生活をしてやがる・・・普通なら殺される・・・でも・・・天智の娘だ・・・消されなかった・・・」

「あなたたちを襲ったのは？」

「高倉は詔で・・・俺の飲み物に毒を入れた・・・失敗・・・したがな。俺はあのあと、このビルで高倉を殺すように言われた・・・あいつは・・・真面目にきやがった・・・俺はあいつを・・・あいつを刺し・・・た。そこに白河が・・・。」

「白河？」

「有能な殺し屋だ・・・あいつに襲われ・・・高倉は・・・落ちて行った。俺も襲われた・・・。」

「まだこのビルにいるかも！」

「白河天皇は・・・男ですね。」

「いや・・・そうとは限らねえ・・・あいつは・・・女に化けて・・・た。」

「後醍醐さん!？」

「・・・もう・・・終わりか・・・な。天智は・・・組織・・・S
econd Emperorの・・・ボスだ・・・本名は・・・本
・・・名・・・は・・・。」

「後醍醐さん!」

「ここです! 君たち! 救急・・・。」

帝丹高校の先生が救急隊と倉庫に来た時は、もう遅かった。

「1:18、死亡確認・・・です。」

「この人のコードネームは後醍醐、下の人は高倉、2人を襲ったのは白河って人だよ。」

「天智ってやつがボスで持統ってやつは天智の娘だつてさ。でも、天智の正体は・・・。」

「言う前に、亡くなりました。」

「綾小路警部、ビルの中に、男物のコートみたいな着た男とかいた?」

「そつえば、いましたわ。いや・・・男やない、女なら。」

「どんな人だよお。」

「ええと、日焼けしとわないんですわ、って感じの服装でなあ、黒い手袋に、黒い大きめのワンピース、黒いバック、長ズボン・・・それが？」

「その人が犯人だよ！」

「白河ってやつは女の格好で殺したんだと。」

「殺して帰り血をあびても、上から大きめのワンピースや手袋をすれば、怪しまれずに逃げることができます。黒なら血を隠せますし。」

「・・・わかりました。そのこの2人、その女を署に。」

「女じゃなくて男だぜ。」

「君たち！」

優作たちが、連絡を受けてやってきた。

「大丈夫だったか？」

「はい。」

「しかし、連絡を受けてびっくりしたよ。」

「まさか、推理して犯人逮捕とは・・・驚きましたなあ。」

「新ちゃんから連絡をもらったの。」

「千賀鈴ちゃんと小菊ちゃん、見つかったそうやで。」

残酷な事実

ピロロロロロ……

「今度は誰だよ！」

「今度は工藤のオカンやないか？」

「うるせえ、服部。もしもし？」

「あつ、僕です。本堂。」

「ああ、何かわかったのか？」

「ええ、麻薬組織についてかなり。少年探偵団の子たちの活躍でだいぶ進みました。拡声できますか？」

「ちょっと待つてる……できたぞ。」

「まず、われわれCIA、FBI、インターポールが調べた結果を……」

「われわれCIAなんて、だいぶ自覚ができてるじゃないの、瑛ちゃん。」

「えっ。」

「冗談冗談！ 俺だよ、黒羽快斗。」

「びつくりした……。」「

『びつくりしたのはこっちや！ お前さっきから転んだりぶつかったり……。なにしてるんや？ このドジっ子！』

「すみません……。とにかく報告します。麻薬組織、Second Emperorは……。」「

「なんやそれ？」

「二番目の天皇という意味です。」「

「だからなんなんや！」

「麻薬組織の正式名称です。彼らはこのまえ倒した黒の組織を尊敬しているんです。だから2番目。コードネームは天皇の名、トップは天智だそうです。」「

「天智……。で、ボスの正体は？」

「それはまだ……。ボスには娘がいるそうです。コードネームは持統。」「

（あの方の娘……。どういたしやしょう？）

(2人か・・・姉は普通の暮らしをさせればいいだろう。)

(アニキ・・・組織のことを言いふらしやせんか？)

(大丈夫だろう、まだ幼い。監視も付けてな。姉の普通に暮らして
る様子でも話しとけばあの方もだまされるだろう・・・。)

(妹のほうは？)

(あいつはあのままだ。親の仕事を受け継がせて・・・コードネ
ムは何だったかな？)

(シェリーです。)

(ふふふ・・・ボスの娘、コードネームはシェリー。)

「おい、宮野。大丈夫か？」

「ええ、ごめんなさい。」 (ボスの娘・・・わたしと一緒にね。)

「いいですか？ その持統、早川氏の偽物の娘だそうです。」

「マジで・・・。」

「彼女はたしか早川氏に引き取られたとか・・・孤児ではなかった
んですね。」

「ボスの娘として、暗躍していたようです。ただ・・・早川氏は、

彼女を信用していないらしくて、目的の早川財閥の財産は手に入れているというふうです。早川氏は麻薬組織に前々から言い寄られていて、持統が何か関わっているのでは？、と疑っているそうなんです。」

「言い寄られていた？」

「ええ。早川財閥の財産を狙っていたそうなんです。早川財閥に何度も取り入って財産を奪おうとしていたそうなんですが・・・そのたびにバれているそうです。天智はおそらく、娘の持統と組織のメンバーの杉野次郎を早川氏に近づけ、財産を手に入れようとした・・・そこを小菊さんたちに邪魔され、本物の娘も現れてしまった。杉野次郎は逮捕され、偽物だとばれて、持統も信用を失った。小菊さんを恨んでいるのもうなずけます。」

「わたしじゃなかったんです。犯人の狙いは小鈴ちゃんです！」

小菊が叫んだ。

「犯人も、動機も、全部分かりました！ あの・・・標準語でいいですか？」

「小菊さん・・・。」

「組織のボスは・・・。」

「杉野太一。」

小菊、新一、平次、快斗、探が同時に叫んだ。

「杉野太一はたぶん、両親から組織を受け継いだんやと思います。その麻薬組織は祇園や宮川町のお茶屋で取引していたんだと思います。お茶屋は口が堅いから。その取引を、小鈴ちゃんが見てしもうたんです！」

「小鈴さんが？」

「細い路地でスーツを着た男2人を見たと・・・なんか話したり、物を渡したり・・・小鈴ちゃんは知らん顔してすれ違おうとしたんどすけど、うっかり転んでしまったそうです。それで、男の人が1人、一緒に転んでしまって、荷物が散らばってしまいましたそうです。小鈴ちゃんは拾い集めて、男の人に渡したそうです。男の人はすぐ急いでで、小鈴ちゃんはずっかりその人の荷物を返し損ねてしまったんやそうです。メモと薬・・・。」

「まさか!？」

「その日、小鈴ちゃんが変なことがあったんやって・・・見せてくれた時、まさかと思って・・・警察に届けさせたんです。麻薬でした。そして、メモのほうには、後一条、後三条って文字と、ばつ印やお茶屋の名前とかが書いてありました。このメモや、小鈴ちゃんや姐さんたちの証言で、何人が捕まったんです。取り締まりも強化されました。」

「せやから、小鈴さんや小菊さんは狙われたんか・・・けど、千賀鈴さんは？」

「うちはたぶん・・・お座敷でお客はんが推理ゲームをやってくれ

たんどす。」

「そのとき、千賀鈴ちゃん、めっちゃすごかったそうです。そのお座敷、いろんなお客さんが来てて。」

「あと、小菊ちゃんに頼まれて・・・宮川町でもいろいろと聞いたんどす。それで麻薬の取引がわかって、警察が取り締まったんどす。」

「じゃあ、麻薬組織としては、千賀鈴さんも狙っているわけですか。」

「元太たちと会った高倉や後醍醐ってやつが、その2人の男だな。」

「組織はスネイクともかわりがある・・・窃盗団はほとんど逮捕されたし・・・たぶん再興のために手を組んだんだろう。あのときと同じで。」

「小鈴さんを使って早川氏から財産を奪い、恨みを果たす・・・なるほど、せやから・・・。」

「小菊さんや千賀鈴さんを連れ去って、警察や探偵達の眼をそらし、警備が手薄になった祇園で小鈴さんを誘拐した。ってとこやな、平次。」

「親父！」

「小菊さん、推理は聞かせてもらいましたよ。」

「きゃあ、優作先生！　　クシユン！」

「小菊さんも千賀鈴さんも服を着替えないと。」

志保がタオルを片手に振り向いた。

「和葉たち遅いな。何してるんやろ？」

「助けて……。」

「園子！？」

園子と真が河原に戻ってきた。

二人とも傷だらけの血だらけだった。

「どうしたの！？」

「……襲われたの……青子ちゃんが最初に襲われて……蘭や和葉ちゃんも助けに行つてそのまま捕まった……あたしもすぐ行つて……捕まりそうになって……そのとき偶然真さんが来てくれて……でも人数が多すぎて……あたしが精いっぱい……」

「たまたま日本に帰ってきて……園子さんは京都だと聞いて……駆け付けたんです……。」

プルルルル・・・

「なんや！」

娘たちは預かった。

舞妓もだ。

どうやら君たちには大勢の仲間が
いるようだ。

赤い山に來い。

決着をつけよう。

「くそっ！」

「ここにおいても意味はない・・・ホテルに戻ろう。」

河原に、くやしい叫びが響いた。

高校生の友情

「知ってるか？」

「知ってるぜ、誘拐だろ？」

「殺人もあつたつて……。」

ホテルは騒がしかった。

無理もない。

夕食のころ、突然戻ってきた新一たちは元気がないし、捜査官たちがしょっちゅう出入りしている。

食堂で堂々と渡されたりしている銃やら文章やらを見れば、騒がしくもなる。

おまけに、普段着の着物だが垢ぬけている小菊と千賀鈴だ。

「工藤、大丈夫か？」

「ああ。暗号が解けねえんだ。」

「大変だな……どんな暗号なんだ、俺たちが解いてやる！」

新一たちのクラスメイトが自信満々でこっちを見ていた。

「赤い山。ここに蘭たちが捕まっている。」

「赤い山……。」

「京都で赤と言えば？」

「着物！」

「提灯！」

「神社！」

「神社？ 神社……そういえば赤いな。」

「鳥居とか赤いもんね。」

「鳥居？ 赤……山……まさか！」

「どうした、工藤？」

「赤い鳥居、山……伏見稲荷だ！」

新一が暗号を解いたため、帝丹高校の生徒はお祭り騒ぎだったが、この一言でどん底に落ちた。

「おい工藤！ 大変や！ 宮野と鈴木の姉ちゃんが、連れ去られてしまった！」

院政

「うそだろ……服部……。」

「ほんまや。食堂から部屋に戻る途中にな。どうやらホテルの中にいるみたいやで、組織のメンバーが。」

「真さんは？」

「無事や、けど、またけがしてしもつて……。」

「そうか……。」

「おい！」

「なんだ？」

新一たちのクラスメイトが集まってきた。

「こんなのが宮野の部屋に！」

「部屋はすぐく荒らされていて……シートもびりびりでした。」

院政

彼が眠る場所！

「宮野の姉ちゃんの字やな……。」

「院政……なんでしたっけ？」

「白馬、中坊レベルやで。」

「ああ、あれでしたな。確か、白河天皇……。」

「白河！？まさか、あの！？」

「ああ。宮野はマジですげえ。部屋がこんなに荒れるほど抵抗しながら、メッセーヂを残してくれた……。院政の白河天皇、つまり組織の殺し屋、白河のこと。彼が眠る場所……たしか墓は……。」

「伏見区や!」

「伏見……上等だぜ!」

「伏見稲荷……ここですね。」

「みんな、準備はいい？」

カシャ……

全員が銃を出して鳴らした。

「やば、かつこよい！」

「すげえ……。」

高校生から拍手が起こった。

黒の組織を倒した時と同じメンバーだった。

蘭たちはいなかったが。

所属の違いは意見の違い

「坊主、大丈夫か？」

「Cool guy。目がうつろよ。疲れているんじゃない？」

「お前ら、本当に大丈夫か？」

赤井とジヨデイが声をかけてきた。

新一はスケボー、平次はバイク、快斗はハングライダー、探は父親と同じ車に乗っていた。（なぜか運転している。）

蘭たちを守れなかったショックからか、今までの疲れからか、4人の眼はうつろだった。

「大丈夫です……。」

「本当？」

「大丈夫……や……。」

「服部君、前！」

探が叫んだ。

「へ？」

「服部、右に曲がれ〜！」

ギギギイー！

バーーーーーーン！

「はあはあ……助かった……。」

「服部、大丈夫か？」

「ああ……けがもしとらんし、平気や平気。」

車が平次にぶつかってきた。

赤井が車から降りて、車が去った方向を見つめた。

「しかし、あぶなかったな……くそつ、逃げやがった。」

「こちら、警視庁の高木。今……ひえー！ 佐藤さん……ギヤ

ー！」

「どうした？」

「警視庁の佐藤です。現在犯人追跡中。高木君、捕まって！」

「ひえー！」

『行くわよ！　　11：15分、ひき逃げの現行犯で逮捕する！』

『高木です。今、佐藤さんが捕まえました。京都府警に引き渡します。どうやら組織のメンバーのようです。』

「組織の奴か・・・たく、ばれていたか・・・。」

「シユウ、どうする？　このままこの急遽作った計画を続けるより、もう一度しっかり立て直したほうがいいかもしれないわ。明日にすればもつと人を増やせるし、装備もしっかりできるわ。このままだと敵の思いつぼよ。彼らはとても危険なんだし・・・奴らと同じくらいよ！」

「しかし、ジヨディ先生。」

目暮警部はいまだにジヨディのことを先生と呼ぶ。

「人質がいるのです。小鈴さん、蘭君、和葉君、青子君、志保君、園子君が捕まっておる。警察としては一刻も早く人質を助けたいのです。」

「そうですね。警察は国民を守るもの。」

「人質の安全が一番です。」

服部大阪府警本部長と白馬警視総監が警察としての意見を述べる。

「しかし、ジヨディ捜査官の言うことも正しいのでは。」

「上から見ていたので分かりましたが・・・あれは明らかに服部君を狙っていました。それにインターポールの捜査官としてはジヨディ捜査官に賛成です。」

優作と盗一が赤井に賛成した。

「何人が選んで、送りこむべきよ。人数を少なくして、あくまで人質の奪還を目標にすれば十分いけるわ。」

「僕も賛成です。プロも大勢いますし、だいぶ手がかりもつかめましたから、組織の壊滅は後回ししても大丈夫でしょう。」

CIAの本堂瑛海、瑛佑姉弟が話し合いに入ってきた。

意見は大きく割れた。

あくまで人質を保護したい日本警察と小五郎ら人質の家族。計画を立て直し、確実に攻めていきたいFBIとインターポール。スパイらしい計画を提案するCIA。真夜中近くの誰もいない大通りは、緊張した雰囲気になった。

いまにも殴りかかりそうな捜査官も何人かいるくらいだ。

「シュウ・・・どうしましょう?」

ジヨディは、このなかではリーダー格の赤井秀一を見上げた。

「坊主、お前たちはどうしたい？」

「・・・確かにこの状態では危険かもしれませんが。」

「せやけど、人質が・・・和葉たちが赤い山に捕まってるんや！」

「スネイクが・・・あいつもいるんだ・・・。」

「このままじゃ黒の組織みたいな組織になっちまう。俺みたいなやつも出てくるかもしれない・・・そんなことは許せない！」

「計画は大丈夫なはずです。」

「さっきの事故も、俺の不注意や。」

「早くしないと、真夜中になっちまう！」

「赤井さん・・・。」

「・・・わかった。計画は続行する！ それぞれ持ち場に！ 赤い山、伏見稻荷神社で会おう！」

「シュウ!？」

「冗談じゃない！ 危険すぎる!！」

ざわめきが大きくなる。

「あんな危険な組織、ほっとけねえ。」

「ありがとうございます。」

「前、気をつけるよ。」

赤井は静かに車に乗り込んだ。

伏見稻荷の駐車場

ブーーーーン!

「ついたで。」

「ああ。」

「昨日来ましたけど・・・そういえば紅子さんが言っていましたね、青を赤に連れていくべからず。あたってしまいました。」

「おい親父、今は俺がキッド。おわかり？」

「いや快斗、わたしが怪盗キッドだ。初代のね。」

「親父がいない間、バツチリ努めてたんだ。俺がキッド。」

「快斗が生まれてないときからずっと怪盗をやっていた。怪盗キッドはわたしだ。」

「どうやら、中森警部にキッドが2人いて紛らわしい、キッドは1人でいい、と言ったのでさっきから上空で大喧嘩しているのだ。」

「Hi, cool guy! 大丈夫？」

「坊主ども、いいしらせだ。」

赤井秀一が上着を脱いで、裏側を見せた。

ガシャガシャ・・・

銃が何丁も付いていた。

「これはキャンティとコルンのおかげだな。あの2人が銃の密売ルートを教えてくれてな、大阪だったから部下を行かせて手に入れてきた。その密売人は捕まえたが。お前らにやる。使い方を間違えるなよ。」

「シュウ、これで奴らと対抗できるわ。」

「だが、密売人はこうも言っていた。数日前に俺たちみたいな客が来て、銃を大量に買ってくれた、ってな。」

「じゃあ・・・。」

「奴らはこれの倍は持っているってことだ。」

「厳しいな。和葉たち、大丈夫やるか？」

「・・・蘭さん達人質の居場所が分かっています。銃の使用時は

気をつけて。」

「役割分担は、あのときとほぼ同じだ。A班は上に、B班は逮捕にまわってほしい。C班は裏から、D班は参道から外れて森の中を行け。E班は人質の奪還と、天智こと杉野太一、スネイクと対決だ。F班は救助やサポート、指示を頼む。」

「30分後作戦よ。じゃあ、今はとりあえずゆっくりしてて。」

警察官や捜査官たちはいろいろ準備やなにかに取り掛かった。

新一たちも銃のチェックをしていた。

犠牲の上の脱出劇

「ちょっとお！ いい加減にしてくれる!?!」

「そつやで!」

「わたしたちを解放しなさい!」

「青子のお父さん、誰だと思ってるの!?!」

蘭、和葉、青子、園子、志保の5人は縛られていた。

意識を取り戻してから、ずっと騒いだり、抵抗したり……。

蘭や和葉は空手や合気道を駆使して抵抗していた。

青子もぎゃんぎゃんわめいた。

園子はメンバーの腕やら足にかみつき、2人ほど病院送りにした。

志保だけは静かに目を閉じている。なにか考えているように。

「あああーっ、うるせえ！ 静かにしろ!」

見張りについていた男が、ついにいら立って拳銃を取り出した。

「静かにしねえと撃つぞ!」

「撃ってみろ!」

「そ、園子……。」

「蘭はあんたたちがリスペクトしている黒の組織と戦った時、見事に至近距離の拳銃の弾をよけたのよ！」

「ちょっと、やめてよ……。」

「撃たないほうがいいわ。撃つと銃声ではれるわよ。組織で教わったわ。」

「その女の言うとおりだ。銃はダメだ。」

もう一人の男が止めた。

「仕方ねーな。」

男は銃をしまった。

「志保ちゃん、すごい！」

「ありがとう。」

と、まあこんな感じで時間は過ぎて行った。

「ちょっと、そのケチ男！ トイレ行きたいんだけど。」

園子が突然叫んだ。

「駄目だ駄目だ。そうやって逃げるんだらう？」

「逃げられっこないわ。さっきから見ているけど、森にも大勢見張りがあるし、無理ね。」

「トイレにも行かせてくれないの？ わたしたち、女の子よ！」

「ほんまやで。行かせてくれへん？」

和葉が園子のたくらみに気付き、ニヤツと笑った。

「青子も行きたーい。」

「わたしも行っておきたいな。」

「だったら今すぐ女のメンバーを連れてくるから、ちょっと待ってな。」

「待つのお？ そうそう、そのバッグ、とってくれない？」

「駄目だ！」

「ケチ男！」

「バッグもとれへんの！？」

「青子、バッグ必要なんだけどな。」

「たかがトイレにバッグがいるか？」

「いるわ。レディーなもの。」

「だれだ？　なんだ、持続か。」

「わたしが付き添うわ。」

「しかし……。」

カチャ……

「怪しい行動をしたらすぐに撃つわ。どう？　これでいい？」

「……いいだろう。裏切るなよ。」

「裏切ったって徳はないわ。」

「おい、お前ら、立て！」

「縛ったままなん？」

「バッグやるからごちやごちや言っな。」

しばらく歩いた後、突然女が話し始めた。

「次の見張りまで結構あるわ。リラックスしていいわよ。」

「えっ?」

「わたしのコードネームは持統。ボス天智の娘よ。あなたたちを逃がしてあげるわ。」

「そんなことしたら、裏切り者って追われるわよ、わたしみたいに。」

志保が意味ありげに持統を見た。

「大丈夫。あなたに協力してもらうから。あなた、銃はもってる?」

「ホテルに置いてきたわ。突然だったから。」

「そう……。持っててよかったわ。この銃使える?」

「使えるわ。」

「なら平気ね。もっていて。あなたたちも。」

「えっ、あたしたちも!?」

「でも、銃なんて使えないし……。」

「危ないとちゃっ?」

「持つてるだけでいいわ。」

蘭たちは急に静かになった。

縄がほどかれた。

持統はすべてを話してくれた。

「早川はわたしが偽物だったことを知った後、わたしを助けてくれた……。わたしをあえて引き取ってくれたのよ。わたしは組織の陰から逃れられた。でも後一条と後三条が逮捕され、祇園や宮川町、先斗町が使えなくなった時、父はわたしを使おうとした。早川も防げなかったわ……。わたしはまた危険な仕事を始めた。つらかったわ……。あなたたちが巻き込まれたと知った時、この計画を思いついたの。」

遠くに見張りが見えた。

「静かに……。あなたたちはその森から抜けなさい。見張りはわたしが何とかするから……。宮野さんは気づいて追いかけたわたしを撃つてくれればいいの。」

「えっ!?!」

「防弾対策はしているわ……。急所をちよつと外してくればありがたいけどね。」

「大丈夫なの？・・・あつ、小鈴さんは？」

「ごめんなさい・・・わからないの。着物を脱がせて、ほかの構成員と同じ格好をしているらしいけど・・・。場所も分からないの・・・。さあ、行きなさい！」

蘭たちは森へ逃げ込んだ。静かに山を下っていく。

持統は見張りと話して、気をそらせてくれていた。

「どじっ？」

「あやしいものは誰も。ただ、警察が来てるみたいです。」

「わかったわ。そうそう、銃はちゃんと持ってる？」

「当たり前ですよ。」

「あら、この銃おかしいわ。直してあげる。」

「どじっも・・・。」

蘭たちはあと少しで千本鳥居の向こう、安全な場所にたどりつきそ
うだった。

志保はチラチラ後ろを気にしていた。

「あつ、あの子たち！」

持統が叫んで追いかけてきた。

その顔がこつ叫んでいた。

撃つてきなさい……。

「志保ちゃん……。」

「ごめんなさい！」

ズカ　　ン！

バ　　ン！

「う、撃つてきやがった。」

「おい、報告だ！　持統さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫だから、早く行きなさい！」

「は、はい……。」

持統はその場に倒れこんだ。

「志保ちゃん、行こう……。」

「急所に……当たった……。」

「志保ちゃん！ 行かなきゃ！」

よろしゅうおたのもつします。

「おーい、おーい！」

「何かあったんかな？」

平次が竹刀片手に立ちあがった。

「へ、平ちゃん！」

「お、大滝はん！？　なんでここに？」

「大阪府警の刑事連れてきたんや！　それより、こっち！」

「なんや？」

「か、和葉ちゃんたちが……。」

「和葉？　あいつ……まさか!？」

「蘭は？」

「青子も?？」

「落ち着いてや……みんな無事や。」

「ほんまか？」

「平次！」

「新一！」

「快斗！」

向こうから蘭たちが5人、しっかりそろって歩いてきた。

「大丈夫だったのか？」

「ちょっと怪我したくらいよ。大丈夫。」

「しかし、どうやって抜けてきたんだよ……あんな警備を。」

快斗が首をひねった。

「持統ってコードネームの女よ。彼女が組織を裏切って、助けてくれたわ。」

「何！？ 持統だって!？」

「組織のトップの娘だそうよ。」

「どうなってんだ・・・？」

ジヨデイが静かにやってきた。

「あなたたちは休んでて。COOL GUY、準備はOK？」

「ええ、大丈夫です。」

「じゃあ、行くわよ。銃撃戦が始まってしまったの。」

「わかりました。」

「待って、わたしも行く！」

「蘭さん、あなたたちは・・・。」

「行くで！ 平次たちに任せられへん、うちらも行く！」

「青子も行くよ！」

「あたしも行くわ！」

「わたしも参加するわ。」

「武器もないし・・・あきらめてちょうだい。」

「あら、武器ならみんな持つてるわよ。」

カチャ・・・

蘭たちは銃を鳴らした。

「わかったわ・・・でも、またF班にまわって・・・それなら参加を認めるわ。」

「・・・わかりました。」

バンバンバンバン・・・

ズカン！　バーン！・・・

ドドドドドドドドドド・・・

「もう、始ってるな・・・。」

快斗がぼつりと言った。

「じゃあ、行きましょう。」

ジヨディがそう言って向こうを指差した。

その時だった。

「ええ……よろしゅうおたのもうします……こっちは大丈夫です。ええ……わかりました……。」

「はい……わかりました。よろしゅうおたのもうします……では、おーきに。」

「小菊さん？」

「千賀鈴さん？」

「ああ、皆さん。」

「ここは危険よ。あなたたちはあっちにいて。」

「すんまへん。もう電話終わりましたン。」

「あっちに蘭さんたちがいるから、一緒にいて。」

「わかりました……小鈴ちゃんをよろしゅうおたのもうします。」

神聖が故

「工藤！ こつちや！」

「あぶない！ 首ひっこめろ！」

バーン！

「工藤君、大丈夫でしたか？」

「なんとか、な。」

「鳥居の向こうにもおるで。 ったくやつかいな奴やなあ。」

「坊主！ 早く来い！」

「ほら、行くぞ！」

「そうですね。 気をつけないと。 ここは朱の鳥居の中、 血を流しても見つけてもらえませんし。」

「ははあ・・・相変わらず気障な奴・・・あっ！」

「白馬、頭ひっこめろ！」

「服部、刀下げろ！」

「なんや！？」

「・・・すみません・・・撃ちのがしました。」

FBIが叫んだ。

「気にするな。しかし、鳥居がじゃまだな。相手も見えないし、狭すぎる。」

「ジョディ捜査官、大丈夫ですか？」

「ええ・・・かすっただけよ。」

E班は苦戦していた。

千本鳥居、約一万基の鳥居の中を通ったのは間違いだった。

もっとも道はそこしかなかったのだが・・・。

ズカーン！

バーン！

ドドドドドドドド・・・

「っっっ！」

「わああ!」

「も、もどれ〜!」

「な、なんだ!？」

赤井は突然戻ってきたメンバーを見て驚いた。

血まみれだった。

「待ち伏せてたんです! マ、マシンガンで……。」

そういつてへなへたと倒れてしまった。

「シュー!」

「退却だ。戻ろう。」

「赤井さん! 小鈴さんは?」

「まだ、生きているはずだ。この状況でこれ以上は無理だ・・・俺
がしんがりを務める。」

新たな仲間

「新一！ 大丈夫だった？」

「へ、平次！」

「俺は生きとるで。けど……。」

きちんと準備ができていないこともあったが、一番は伏見稲荷という特殊な場所にあった。

千本鳥居と呼ばれる一万もの鳥居が原因だった。

鳥居に囲まれた道を進むしかないのだが、ここに待ち伏せされたり、鳥居の外から攻撃されたりされ、被害が大きかった。

一番ひどかったのは、E班だった。

「シュウ……どうするの!？」

今後、どうするかが大きな問題となっていた。

「せめて小鈴さんだけでも……。」

「しかし、この状況でどうやって救出するんだ！」

「わたしにやらせてください！」

「いい考えがあるんです！」

小菊と千賀鈴だった。

「しかし……。」

「大丈夫です。犯人も全部わかつとるんです！」

「ほら、姐さん達も来てくれはったし……。」

みると、ワゴンタイプの車から着物姿の舞妓や芸妓たちが大勢出てきた。

「なるほど……そうゆうこっちゃな？」

「怪盗でも思いつきませんでしたよ。」

「警察としては許可したくはないでしょうが。」

「目暮警部、彼女たちもE班に入れてください！　お願いします！」

「しかしなあ・・・工藤君・・・。」

「あら、彼女たちの警備ならわたしたちがやるわよ。」

志保が銃を見せた。

「わたしが元組織のメンバーだったこと、忘れてない？」

「あたしも行きます！」

「うちもやー！」

「青子も行く！」

「あたしも行くわ！　蘭たちだけに任せない！」

「僕も・・・行きます・・・。」

真がつぶやいた。

「ま、真さん！？　だめよ！　まだ治っていないわ！」

「園子さんを・・・危険な目に合わせることはできませんから・・・。」

こうして新たなE班は、ほかの班と共に参道を登って行った。

白い決闘

バンバンバンバン！

まずCD班が鳥居の外を行き、続いてAB班が鳥居の中を行く、という作戦は大成功だった。

新一たちも順調に進んでいった。

「いたぞ！」

敵が何人が襲ってきた。

「てやーっ！」

「いつけえー！」

そのたびに平次は剣道で、新一は銃やボールで、快斗はトランプ銃やマジックで、探も銃で応戦した。

蘭や和葉も活躍し、青子や園子も必死に2人を守っていた。

真もどんどん敵を倒していく。

志保も銃を巧みに使い、敵を倒していった。

「山頂や！」

平次が叫んだ。

「よし、行こう！」

赤井が言った。

が、それを新一が止めた。

「僕たちに任せてください。」

新一、平次、快斗、探、そして小菊と千賀鈴が、ボスの前に立った。

ジーパンにTシャツ、長い髪を無造作に一本のかんざしで止めている小菊と千賀鈴は、どこか凜としていて、美しかった。

周りには大勢の組織のメンバーがいて、銃などの武器で狙っている。

「やっと会えたな。」

「両親から受け継いだ、」

「世界中に名の知れた、」

「麻薬組織、Second Emperorのボスの……。」

「……」「杉野太一さん？」「」「」「」

「あなたの両親のはただの事故やない。」

「おそらく銃撃戦になり、運転をあやまったのでしょう。その証拠に、車からは銃弾が見つかっています。」

「御両親の死で組織のトップになったあなたは、悲願であった組織の拡大を行ったのでしょうか。」

「けど、組織の拡大に金をつぎ込みすぎてしまった……せやから早川財閥の財産を狙うたんや。せやる？」

「そこで早川はんの娘を使うたんや！ あなたは弟はんの杉野次郎を秘書にして自分の娘を送りこんだ……そして……。」

「小静ちゃんと小千津さんを殺して、さらに小鈴ちゃんも狙ったんや！」

「この事件は、小菊さんが解決して、杉野次郎は逮捕された・・・そうですよな？」

「そしてこの事件で娘が偽物だったことが早川氏にばれた。」

「さらに、この小鈴さんと小菊さん、千賀鈴さんによって、麻薬の取引がばれてしまった。お茶屋で取引ができんようになって、組織はまた財政難になってしまった。」

「先の事件で逮捕された黒の組織のメンバーが話してくれましたよ。あなたたちがよく財政難になっていたことを。」

「それなのに、その黒の組織に近づきたくて、あなたは・・・。」

「窃盗団と・・・スネイクなんかと・・・手を結んだんだ！ 親父を殺そうとした・・・あんな奴らに！」

「さすがだな、怪盗キッド。いや、黒羽快斗と言ったほうがいいかな？」

「おや、スネイク。わたしのことはもう忘れたのか？」

「ふん。お前は黒羽盗一。しぶとく生きてたんだってな。」

「親父！」

「ああ。」

P O M

「ははあ、怪盗キッドが二人もいる……。」

「今夜、お前と決着をつける……。」

シュパーン！

シュパーン！

ズカン！

ズカン！

「うっ！」

「く、黒羽？」

「盗一さん！」

新一たちは駆け寄った。

二人の服が、赤く染まっていた。

白によく映える血の色だった。

ズカ ン！

ズカ ン！

「と、父さん！？」

「オトン？」

「黒羽、とどめを！」

「てやーっ！」

平蔵が竹刀でスネイクのバランスを崩させた。

優作は銃でスネイクの動きを制限させた。

白馬総監が、手錠を片手に盗一の肩をたたいた。

シュパーン！

シュパーン！

スネイクは両足にトランプ銃を受け、ついに倒れた。

盗一と快斗、二人のキッドが放ったものだった。

白馬警視總監と、服部大阪府警本部長が、手錠をかけた。

「つぎはお前の番だ！」

新一が叫んだ。

豪華な推理ショー

「小菊さんと千賀鈴さんを誘拐したんは……。」

「小菊さんが杉野次郎の逮捕に貢献、麻薬取引を警察に連絡し、探偵としてよく切れるから、ですね？」

「千賀鈴さんはあるお座敷で推理物のゲームをすぐにクリアしてしまった……彼女もまた麻薬取引の撲滅に大きく貢献しましたし、頭もよく切れる。あなた方としては始末しておきたい……。」

「だからあの2人を襲い、始末できそうやったら始末してしまおうと思うたんや、ちやうか？」

「そんな中、財政難に陥った組織を立て直すために、もう一度早川氏を使おうと考えた……だがもう持統は使えない、だから実の娘である小鈴さんを使おうと考えた。」

「小菊さんや千賀鈴さんを襲ったのは小鈴さんから目をそらさせるため、でしょう？」

「そして、小鈴さんを誘拐しやすくするために、俺を呼んだ。俺みたいな探偵でも、警察と協力して小菊さんと千賀鈴さんを追えば、祇園の警備は手薄になる。俺らが遠くの嵐山にいて、祇園から目をそらせている間に小鈴さんを誘拐しようとしたんだろ？」

小五郎がゆっくりと歩みでてきた。

「けど、予想外の事が起きた。工藤と黒羽、白馬の高校が京都に来てたんや。ついでに俺もな。そして清水の舞台で小菊さんと千賀鈴さんに会ってもうた。」

「僕たちが関わっていると知り、毛利探偵にやらせようとした事を僕たちにやらせたんですね。」

「東の高校生探偵 工藤新一、西の高校生探偵 服部平次、元祖高校生探偵 白馬探、そして月下の奇術師 平成のアルサーヌ・ルパン 鮮やかな手口で宝石を盗む……。」

「僕としたことが……まんまと乗せられて、小鈴さんを守りきれませんでした。」

「おいおい……俺が話し終わってないじゃないかよ！」

「それともう一つ、予想外の出来事がありました。われわれも京都に来ていたこと……おかげでずいぶん追いやすくなりました。」

優作たちも静かに話し始めた。

「俺たちも協力したぜ！」

「事件を解決したんですよ！」

「コナン君や哀ちゃんがいなくても、解決できたよ！」

少年探偵団の3人もやってきた。

「組織でも小学生に殺人を解決されるなんてへまはしなかったわ。」
志保がほほ笑んで見せた。

「そつだな。やつらはそんなことしないな。」

「FBIもね。」

赤井やジヨディたちも来た。

「あら、CIAでもそんなことはしないわよ。瑛ちゃんならやりかねないけど。」

「瑛海ねえさん、ひどいよ……わあっ！」

瑛佑が躓きながらも、姉の水無怜奈とのぼってきた。

「警察もなめんでくれんかな。」

おなじみのメンバーや、服部本部長、白馬警視總監がすごいみをきかせた。

「小鈴さんは発信器のついた手ぬぐいをもってたんや。そのおかげ

でここだってわかったんや。」

「赤い山、の暗号は、僕のクラスメイトが解いてくれましたよ。」

稻荷山の山頂に、豪華なメンバーが集まった。

小菊と千賀鈴が、かんざしを引き抜いた。

長い髪が風にゆれた。

「さあ・・・小鈴ちゃんを・・・。」

「返してー！」

祇園小唄

しばらくの沈黙が続いた。

突然、パチパチと拍手の音がした。

「すばらしい！ さすがだ……。まさかここまで突き止めるとは思わなかったよ。」

天智、いや杉野太一が新一たちのほうへ歩み寄ってきた。

「さすがだよ……。わたしも君たちが来てくれるとは思っていなかった。君たちの御両親やお友達もね。」

杉野太一は全員を見渡した。

小菊と千賀鈴がかんざしを片手に飛びかかった。

「いい加減にしい！」

「小鈴ちゃんを返してえ！」

杉野太一は笑いながらかわした。

「いいだろう。彼女はここにいる。われわれと同じ服を着て、変装させた。見破れたら返してやろう。だが、見破れなかったら……。」

「

カシャ・・・

杉野太一はライフルを出して見せた。

「ここにいる奴、全員撃ち殺す。」

その顔は殺人鬼の目だった。

「な、なんだと!?!」

「キヤー!」

「どつするんだ!?!」

あたりは騒然となった。

組織のメンバーも啞然としている。

「そげなこと、聞いとらん! 俺はやめさせてもらおう!」

一人の男がそういつて走り出した。

バーン!

「俺は本気だ！」

ざわめきは大きくなった。

悲鳴や鳴き声、叫び、怒号、ありとあらゆる声が交錯した。

「みんな落ち着てくれはりますか？」

「ねえさん、お願いします。」

小菊と千賀鈴の声で、はあーい、と何人か普段着（着物）の芸妓たちがぞろぞろとやってきた。

「ほんなら、最初は祇園小唄から・・・はあい！」

賑やかな三味線の音に合わせて、小菊と千賀鈴が踊り始めた。

器用に扇子を回しながら、巧みにあたりを見回している。

カンのいい人は気づいていた。

「さすが、舞妓探偵、だな。」

「せやな。舞妓らしいわ。」

暗闇の中、突然小菊が叫んだ。

「小鈴ちゃん！」

そう叫んで、泣きながら抱きついた。

真っ黒な服、まとめられた髪、黒い帽子姿だったが、それは誰がどう見ても、小鈴だった。

そう、彼女は祇園小唄に合わせてかすかに動く女を探していたのだ。
った。

「う、うそだろ・・・。」

「杉野太一、誘拐の容疑で逮捕する!」

「ついでにほかの容疑でもな。」

白馬警視總監と服部大阪府警本部長が、自ら手錠をかけた。

すべて、終わった。

景

「おかげさまで、何とか容疑者の身柄を京都府警に移せました。ご協力ありがとうございました。」

狩矢警部が携帯を閉じて言った。

「ホテルまで送りますよ。パトカーのサイレン付きで。」

「そうだな、帰るか。」

「今からなら3日目の行動に間に合うかもしれませんし。」

「個人行動になるんだっけ？」

「個人か班だろ？」

「ちよい、待てや。」

賑やかに帰ろうとした新一たちに、携帯を閉じながら平次が言った。

「もう1、2分待つてくれへんか？」

「なんだよ。帰るぞ！」

「ええから。ちょい待てや工藤！」

「わ、わかったよ……。」

平次は腕時計をじいっと見ていた。

「そろそろやな。」

平次はそういつて顔を上げた。

「ええものが見えるかもしれへんわ。」

その時だった。

日がのぼった。

赤い光がさあーっと広がった。

今まで何かもやもやしていた風景が、はっきりと見えた。

赤い朝日の中、赤い鳥居の向こうに、暮盤があった。

長い間都を務めてきた、かつての都。

京都。

京の都は赤い朝日によく映えた。

その景色は、本当にきれいだった。

「きれいー!」

「すっごーい!」

「めっちゃきれいやなあ。もしかして、これ何かの計画なん?」

「耳元でぎゃんぎゃん騒ぐなボケ。」

「計画じゃないんだろ? どーせヒマだから天気予報でも調べてみ

たら……。」

「たまたま日の出の時間と重なっていた、でしょう?」

「さすがやな、白馬に工藤。」

「けど、きれいだな。」

「本当にきれい!」

みんな同じ風景に心を打たれていた。

そして、小さな決心をしていた。

「なあ、工藤。ケシキって漢字で書けるか? きれいなケシキ、
h e v i e w i s w o n d e r f u l ! のケシキや。」

「バー口。書けるに決まってるだろ?」

「予告状にひらがなで書くわけにはいかないだろ?」

「海外に行っても、それくらい書けますよ。」

「小学校の時、なんて教わったか覚えとるか?」

「ふつーに教わった気がする。」

「何ドリルだっけ？ 漢字練習ドリルみたいなのがあった気がする・
・。。。」

「おもいだしたあ！ あれでしょ？ 青子あれ使ったのおぼえてる
！」

「僕はいつ教わったのか。。。」

「わたしもよ。そのころは組織の仕事で忙しかった気がするわ。」

「わたしは、お母さんに教わったのかな？」

「あたしは恋愛小説で。うふっ。」

「和葉、お前覚えてないんか？」

「ええとなあ、思い出したわ！ えーとなあ。。。」

和葉は空中に指で書いた。

「日が昇り、京の景色は美しい・・・やったよね？」

「せやで。俺らはそうやって教わったんや。日が昇り、京の景色は美しい。ほんまやったな。」

京の町はだんだんと明るくなっていった。

町が起きだした。

未練を残しながらも、新一たちはゆっくり山を下って行った。

朝食

「工藤、工藤、工藤！」

ホテルに戻った時は、ちょうど朝食前のざわざわした身支度の時間だった。

そのため大騒ぎになってしまった。

早くも工藤コールが起こった。

「きゃーキッド様！」

「キッド、キッド・・・なんだよ、元に戻んなよ黒羽。」

「そつだよ、黒羽君。」

「頼むから・・・後ろ見てくれよ・・・。」

「黒羽君。あなたの行動は正解でしたね。」

「青子、あとちょっとでもキッドの格好で歩き回ってたら、捕まえるつもりだったのになあ。」

「せやな。探偵としてはキッドはほっておけん。」

「怪盗キッドは探偵の敵、だもんな。」

「わかっただろ？」

「うん……。」

工藤コールばかりではない。キッドコールや白馬コール、服部コールも起こっていた。

もっとも、後の二人のコールは少々小さかったのだが。

とりあえず、朝食を食べることになった。

新一たちの周りには話を聞こうと大勢の高校生が集まっていた。

「なあ、服部。」

新一がパンやスープを乗せたトレイを机に置きながら、すでに食べ始めている平次に声をかけた。

「なんや？」

「今日の個人行動なんだけど……。」

「わかつとるって。俺の通なコースを回るようにしてある。まあ、昨日のせいでいくつか変更せざるをえなかったんやけどな。」

「俺と蘭はパス。」

「はあ!?!」

「いいだろ・・・ちょっとまわってみたいところがあったさ・・・昨日は寝てないから仮眠もとっておきたいし・・・。」

「俺と青子もパス。」

「黒羽!?!」

「いいじゃんか、別に。」

「服部も和葉ちゃんも行けばいいだろ？ 先帰っててもいいし。」

「せやけど工藤。そうすると明らかに残りが・・・。」

「あたしは構わないわよお！ 真さんとまわるから。」

園子が乱入してきた。

「蘭たちにさっき聞いたわよ。」

「どづゆづづっちゃ！ おい工藤!」

「わりい。ちょっと・・・。」

「でも、そうすると志保ちゃんが余っちゃうね・・・やっぱりみんなでまわらない?」

蘭が不安げな顔をした。

「僕も余っていますから、余り者どうし、まわりますか?」

「構わないわよ。」

「じゃあ、白馬と宮野がまわれればいいんじゃない?」

快斗が明るく言い放った。

「なあ、平次。べつにええやろ? うまいラーメン屋さんかなにか行きたいし。」

「しまった! あのラーメン屋!」

「どうかしました? 服部君。」

「いや・・・めっちゃうまいラーメン屋があつてな・・・。」

「ラーメンか・・・食べたいな。」

「じゃあ、ごうしない?」

「なあに、蘭ちゃん。」

「お昼にそこに集合、ってすればいいかなって。」

「それ、いいかもね。」

「じゃあ、そうしましょー！」

というわけで、2人組でまわることになった。

午前中

「よくねたあ・・・ねえ新一、これからどうするの？」

「決まってるんだろ？ せっかくの京都なんだから、観光するんだよ。」

「でも、有名なところは昨日まわっちゃったし。」

「けっこう行きそびれてるんだぜ。ただ、午前中どつつぶすかだな。あんまりラーメン屋から離れるといけないし・・・。」

「工藤君に蘭ちゃんじゃない!？」

「あつ、佐藤刑事。高木刑事も。どうしたんですか？」

「捜査も終わったし、仮眠もとったし、京都観光よ。」

「てつきりもう帰ったんだと思ってました。」

「ほんとはそのはずだったんだけど・・・。」

「すみません。予約し間違えて・・・。」

「高木君、全く違う新幹線に予約しちゃったのよ。で、あなたたちと同じ新幹線になっちゃったわけ。だからそれぞれ観光することになったの。」

「そうなんですか……。」

「わたしたちもそれぞれまわることになったんですけど、どこに行こうか迷っていて……。」

「わたしたちは清水のあたりに行こうと思っているの。昨日は捜査で忙しかったから。」

「金閣寺あたりもいいかなあと思ったんですけど、佐藤さんが……。」

「お土産が買ったかったのよ！ 清水寺のあたりにはお土産屋さんがたくさんあるらしいから。」

「工藤君や蘭さんも一緒にどうですか？」

「清水は昨日もおとといも行ったよなあ……。」

「ごめんなさい。わたしたちはパスします。」

「いいのよ。無理しなくても。じゃあ！」

「なあ平次、どうするん？」

「せやなあ・・・午後は嵐山あたりに行こうと思ってるんやけど・・・午前中なんや。」

「東福寺にでもいかへん？」

「いまは5月や！紅葉はまだやで、アホ！」

「新緑もええらしいで。」

「・・・わかった。ほな行くで！」

「わっ、ちょ・・・。」

ブーーーーーン！

「快斗、鞍馬寺って・・・すんごく遠いよ。やめとこつよ。」

「大丈夫、間に合うから。しっかりつかまってるよ。」

カシャ・・・

「ちょっと!!!! こじビルの上だよ!」

「大丈夫ですよ、お嬢さん。」

「快斗!? ちょっと、なにこれ!?!」

「ハンググライダーだよ。風向きもいいし、これでビューンと……えっ!?!」

「もしもし、お父さん! 怪盗キッドが今から鞍馬寺行くから! いまハンググライダーで飛んでる!」

「で、どうするの? 元祖高校生探偵さん。」

「困りましたね。」

「京都は興味はあるけど、とくにまわりたいところはないわ。そう
ね……。」

「午後は嵐山あたりに行きたいと思っっているんですけど、お昼がね・
・そうですね・・四条河原町あたりにでも。」

「あら、いいわよ。」

「そ、園子さん・・・。」

「じつちじつち・・・じつよ!」

「じつは?」

「白峰神宮よ! スポーツの神様。お参りしてきたら?」

「そうですね・・・。あと園子さん、その下着みたいな恰好はやめ
たほうがいいですよ。」

「いいじゃないの。」

「ここに倒れてたんだよね。」

「うわぁ・・・血の跡が残ってる。」

「あんたら、昨日の・・・。事件は解決したし、ゆっくり京都見物でもしたらええ。」

「わっ、おじやる警部!」

「こらこら。警部さんに失礼だぞ。今日はゆっくり見物しよう、な。日本史担当の俺が選んだコースまわろう。」

「いやだよ!」

「これは僕たちが誰の助けも借りずに解いた・・・。」

「初めての事件なんだぞ!」

「ちょっと見ておきたいんです・・・。」

「ええやる。小学生探偵の諸君。けど、ちょっとや。ええな?」

「そのあとは俺が選んだコースをまわろう。嵐山にでも行こう!」

ラーメン屋

「うまかった！」

「なっ、ここのラーメンは最高や。」

「そっいゃ、午後はみんなどうするんだ？」

新一がほかの男子メンバーに聞いた。

京都のうまいラーメン屋、に集合。（快斗と青子は諸事情で遅れたが。）みんなでラーメンを食べた。

それなりの人数だったので、2つのテーブルに分かれていた。

「たしか僕たちは、5時に京都駅集合でしたよね。今は12時41分25秒。割と遠くまでいけます。」

「俺は嵐山行こうと思ってんだ。」

「そんなことしたら、さっきみたいに遅刻するんじゃないか？」

「だから！ あれは青子が……。」

「だいたい青子ちゃんとキッドのハンググライダー使って移動しよっうなんて無謀だろ。」

「しかたないだろ・・・おかげで中森警部に追いかけてまわされたんだから・・・。」

「俺も嵐山行こうと思ってたんだ。白馬は？」

「偶然ですね。ぼくも嵐山にと思っていたんですよ。京極さんは？」

「いや・・・僕はあまり考えてなくて。園子さんの行きたいところに行こうと思っているんです。」

「服部。今から嵐山に行つて、5時までには京都駅に着けるか？」

「2時間くらいしかゆつくりでけへんけど、ええか？」

「ああ、構わないぜ。」

「なら、タクシーが一番早い。電車はめんどくさいからな。俺らはバイク、黒羽は？」

「ハンググライダーで。さっき調べたら風向きもいいしな。青子はタクシーに乗せるよ。」

「俺はスケボー使うよ。蘭はタクシーで。」

「そうすると・・・7人が・・・大型タクシー頼もうか。」

「ええ、お願いします。」

「この服部平次はんに任せとき！」

天の龍の寺

「ええとこやなあ。」

ここは天龍寺。

世界遺産の気持ちのいい寺だ。

庭がよく見える座敷が解放されていて、ゆっくり休めるようになっていた。

「平次、何しとんの!?!」

「気持ちがあえから、ここでゆっくりしよ思つてな。工藤や黒羽、白馬や京極はんもそつするやろ?」

「まあな。」

「ここいいところだしな。」

「そのつもりでしたよ。」

「けど、ずっと天龍寺いるのもどつかと思わん?」

「ええんやないか?」

「どごが!?! うちらはともかく、蘭ちゃんたちは今日しかないん

「やよー！」

「こっちは疲れてるんや！ 休ませろボケ！」

「なんやてー！」

「なあ、服部。こうしないか？ 蘭たちは好きなところを回って、俺たちはここでゆっくりすれば。」

「そーしよか。じゃあ、4時に渡月橋に集合せんか？ そのあと土産でも買って、5時までに京都駅にいこか。」

「ええよ。じゃあ、野宮神社にでも行かへん？」

「その神社知ってる！」

「俺らはカフェでわらび餅でも食べて、レイコー飲んで、時間つぶすか？」

恋の神様

「ここが、野宮神社や。」

「知ってる！ 源氏物語の舞台にもなっただよなね。」

「さすが文学少女蘭！ くわしいわねえ。」

「園子も知ってるでしょ？」

「いくら永遠のラブストーリーでも古典でしょ？ そんなに読む高校生なんていないわ。」

「わたしだって、全部読んでないよ。簡単にまとめてくれたビギナー向けの本を読んだだけだもん。」

「青子、もっと大きい神社だと思ってたけど、小さい神社だね。」

「これが、有名な鳥居や。」

「本当だ。ふつうの木！」

「写真撮りたいなあ……。」

「和葉ちゃん、ここって何の神社？」

「恋愛が有名やけど、学問とかにもきくんやって。」

「恋愛か……蘭、拝んどきなよ。」

「なんでよ……そんなこと言ってる園子も拝んどいたらっ？」

「あたしはいいわ。和葉ちゃんや青子ちゃんも拝んどきなさいよ。そつえば……志保ちゃんいないわね。」

「そつえば……。」

「あつ、いた！ 志保ちゃん！」

「呼んだ？」

「あんなところにいないで、こっち来てお参りしようよ。」

「恋愛には、興味ないし。」

「そんなこと言わないで、拝んどきなよ！」

「……、学問にもきくそつだし。」

「志保ちゃんならどんな大学でも受かるけどな。」

「わかったわ。でも、この後どうするの？」

「えっ……。」

「……、ずいぶん小さいし、やることないんじゃない？」

「そつやね……じゃあ、どっかのカフェにでも入って、おいしい

ものでも食べん？」

「いいねえ。」

「あたし、よーじやにも行きたい！」

「とにかく、お参りしよう。」

パン、パン・・・

5人は静かに祈った。

なにをお願いしたか、知るのは神様だけ。

渡月橋近くのカフェ

「なあ、服部。」

「なんや？」

「いいかげん、ほかのとこ行こうぜ！」

「わかった・・・わかったから・・・。ほんなら、この先のカフェにでも行こうか、な？」

「ったく・・・。」

というわけで、新一たちは天龍寺をようやく出て、渡月橋近くのカフェに入った。

自然と話もはずみ、まもなく最近といた事件の競い合いになった。

「・・・ってなわけで、この服部平次様がこの迷宮入りの事件を解決に導いたんや。」

「そんな事件すぐ解けるだろ。」

「ぼくも割とあっさり。」

「でも、3人とも海外でも有名ですよ。よく向こうでも名前を聞きます。」

「ほんまか？ いやー照れるわ。」

「なあ、いいかげん事件の話やめてくれないか？ ついていけないだけ。」

「そっぴや、今度はどっちが行くんだ？」

「はあ！？」

「ああ、あの鈴木財閥の。挑戦状は……。」

「どっちのキッドが受けて立つんや？」

「親父。じゃんけんで負けた。」

「なーんだ。じゃあ、次は父さんの出番か。」

「へー！？」

「なんかこんなルールができたんや。」

「盗一さんがキッドのときは、僕たちの父親が追っ。黒羽君がキッ

ドのときは僕たちが追う。」

「ははは……。」

ガラガラガラ……

「もう、園子。買いすぎだよ。」

「いいじゃない。」

「このわらび餅はおいしいで……って平次!？」

結局、全員で行動することになった。

一気に朱雀の方角へ

ブーーーーン!

「あれえ、平次お兄さんだ!」

タクシーに乗った少年探偵団の3人が、バイクに乗っている平次と和葉に手を振った。

「わーい!」

「あつ、あれは新一さん!」

「スケボー使ってやがる。」

「ああ、お前ら。どこ行ってたんだ?」

「あたしたち、嵐山にいった、そのあと鞍馬寺に行ったの。」

「それじゃあ、僕たちとは逆ですね。」

「「「か、怪盗キッド!」」」

「おい、黒羽。スケボーに乗ってくんな。」

「疲れたんでね。では!」

「俺たちは京都駅に行く前に食べ物の補充すつからな。お前らはさ
きに行けよ。」

「はい！」

「工藤。」

「げつ、先生。」

「集合時間、守れよ。」

「はい……。」

京都駅に待ち構えるのは・・・

「京都駅に到着です。2日間ありがとうございました。」

「」「」ありがとうございます。「」「」

「料金はいくらかしら？」

「ええと、半日貸し切りやから・・・。」

タクシーの運転手は「ごそごと調べ始めた。

「ほい。これで払ってくれへんか？」

「あら、やさしいのね。でもお財布のほうは大丈夫？」

「大丈夫やで。大阪府警本部長の息子なんやから。」

「それに、宮野の姉ちゃんたちはおごづかいで決められとるんやろ？」

「そつでもないわよ。ね、工藤君。」

「ああ？」

「ゴールドカード、持ってきたんでしょっ？」

「ああ、父さんの借りてきた。」

「この放蕩息子！」

「わ、わりい蘭。」

「ごめんね、蘭。あたしも持つてるんだあ。」

園子がカードをちらつかせた。

「パパにもらったんだ。結構役に立ったわよ。」

「だからあんなに買ったのね！」

「へへへえ。」

「でも、平次もそんな感じやで。昨日おばちゃんにもらったやろ？ おこづかい。」

「まあな。」

「そういえば、服部よく東京に来るもんな。飛行機で来たこともあったよな。」

「へへ、学校帰りやったからな。」

「そういえば、快斗もおこづかいもらってたよな。かなり。」

「親父がくれたんだよ。この間のマジックショーで稼いだって。」

「それってまさか？ 宝石売って稼いだんじゃないよね！」

「そうではないと思いますよ。僕も似たようなものですが。」

「わたしもよ。この間薬の開発で収入があったから。」

「つまり、決められた金額をまじめに持ってきたのは、蘭と青子ちゃんだけってことか。」

「そんな……。」

「いいじゃんか。青子も蘭ちゃんもいろいろ買ってもらったんだろ？」

「ていうか、蘭はおこづかいもらってなかった？ 妃弁護士に。」

「青子も俺の母さんからもらってなかった？」

「「そういえば。」」

「このメンバー、意外とセレブね。」

新一たちは駅の中を歩いて集合場所に向かおうとした、が……。

「工藤君！ 服部君！ あれ！」

「や、やべ……。」

「はよにげんと……。」

「そ、そうだな……。」

「あつ、工藤君！」

「服部君も。」

「すみませーん、出版社のものです……。」

「こちら、京都駅です。たったいま、工藤君、服部君、黒羽君、白馬君が……。」

「しまった……。」

「……だったそうですね？」

「ああ、いや……へへへ。」

新一たちは足止めを食らい、時間は刻々と過ぎて行った。

「もうヤバいぜ。ごめんなさーい！」

「煙幕か・・・まったく、怪盗に助けられちゃった。」

京都駅は別れの地

「いやー間に合ってよかったよ。」

「沢木さん。昨日はお世話になりました。」

「そんな。わたしはなにもしてません。」

「沢木さんが阿笠博士と一緒にいてくれなかったら……。着替えをとりに行った蘭たちはその途中で捕まっしてしまいましたから。」

「いやいや、君たちのほうがすごかったよ。」

「せんせー！　せんせー！」

「小菊。間に合ったか。よかったよ。千賀鈴さんも、来れたみたいだね。」

「踊りの稽古があったので、これなさそうやったんですけど……。」

「そういえば……。誰かにおくってもらったのかい？」

「さすが先生、あたりどす！　水尾さんに送ってもらいましたん。」

「あつ、沢木せんせ。このあいだはおーきに。じゃ、失礼します。」

「千賀鈴にも旦那さんができたかな……。」

新一たちは高校生たちにまぎれていたが、抜けてきた。

「千賀鈴さんに小菊さんや！」

「名推理でしたね。ぼくらもかないませんよ。」

「そんなあ！」

「うれしい！」

着物姿の2人は舞妓らしく身をよじって大げさに喜んで見せた。

「小菊ちゃんーん！ 千賀鈴ちゃんーん！」

「小鈴ちゃんやない！」

「まにあつたんや。よかつたなあ。」

「ええ。父に送ってもらうたんどす。ああ皆さん、昨日・・・やなくて今日はおーきに、ありがとうございます。」

「いや、僕たちはなににも。お礼をいうならこっちの2人に。」

「ええ、2人ともおーきに。」

「大丈夫やったん？」

「今日は事情聴取と病院にちょっとやったから。けど昨日はほんとに怖かったぞ。」

「わたしたちはここから大阪に行って、そこから飛行機に乗るわ。」

ジヨデイたちFBIが残念そうに言った。

「じゃあジヨデイ先生、アメリカに戻るの？」

「ええ、残念だわ。また機会があれば戻るわよ！アーケードゲームやるんだから！」

「僕たちはもう少し日本にいます。新幹線も一緒だし。」

本堂瑛佑はそういつて荷物をよいしょと持った。

「瑛ちゃん、まだ時間あるわよ。」

「あっ、そっか。」

「いやー今回もお世話になりましたなあ！」

小五郎は陽気に綾小路警部の肩をたたいた。

「お世話も何も・・・あなた何もしてないじゃない！」

英理はそうため息をついた。

「つたく、そんなへぼ探偵と同じ扱いを受けているなんて情けねえなあ。」

「そんなこと言えないんじゃないですか？ 中森警部？」

警察関係者も同じ新幹線（高木刑事のミス）だったので、京都駅は顔なじみばかりになってしまった。

「次は予告状の現場で。」

「ああ、もつとも予告状ではなく、挑戦状だな。」

「次は大阪か。大阪府警総出で立ち向かうぞ。」

「警視庁は関係ないが、まあ中森君が行くだろう。」

「お手柔らかに。」

「もうすぐやな。」

「なんだよ服部。」

「もうそろそろ時間や。」

平次が腕時計を見せた。

「そろそろお別れや。」

どこかさみしい空気が流れた。

雑音のなか、アナウンスが響いた。

「じゃーな。工藤、黒羽、白馬！」

「バイバイ！ 蘭ちゃん、青子ちゃん、園子ちゃんに志保ちゃんも！」

「Good bye . Cool guy .」

「じゃあ坊主ども。次は事件がないといいな。」

「いってもうたな。」

「今度こっちに来るときは事件がないとええな。なあ、平ちゃん。」

「なあ平次。このあとお好み焼き屋さんでもいかへん。」

「アホ。これから府警本部で事情……。」

「だめや。ここからは警察の領分。おまえは引っ込んでろ。」

新幹線でのひと騒ぎ

「はいはい。最後の晚餐、夕食は新幹線で豪華弁当よ！」

一応実行委員の園子が叫んだ。

「また弁当？」

「多くねーか？」

「鈴木！ 何けちってんだよ！」

「どこがケチってる？ 正直給付金じゃ足りないんだからね。そんなこと言う奴の分はなし！」

「なんだよ！ お前に決める権利ないだろ！」

「そーだそーだ。」

「あなたたちねえ・・・いいわ、教えてあげる。この弁当代は鈴木財閥から出してるのよ！ わかった？」

文句が出る中、園子は突然、「おねがーい！」と叫んだ。

「はあ？」

「これからカラオケ大会やりまーす！」

「へえ？」

「無理だろ、園子。」

新一が愛読している推理小説から目をあげていった。

「無理じゃあないわ。鈴木財閥特製カラオケマシンを運びこんであるから。」

「でも園子……ここ新幹線、公共の場だよ。」

「大丈夫、この辺は貸し切りだから。前は警察関係者、後は江古田高校。その後ろもあたしたちの仲間だし。じゃあ、みんな歌うわよ！ ルールは簡単！ 一番下手だった奴が、弁当のごみを持ち帰る！ 全員分ね。」

「うそー。」

「マジで！？」

「大丈夫よ。工藤君がいるわ。」

「そっか……なーんだ。ふふふ……志保ちゃん、ありがとう。」

パチパチ・・・

「ちよーづめー!」

「きゃー!」

(やべえ・・・このままじゃ100パー・・・ビリ・・・。)

新一は無関心を装って推理小説を読みながら、あせっていた。

(待てよ・・・そうか!)

「新一、もうすぐだよ。」

「なあ蘭、俺ちよつとトイレ。」

新一はトイレに駆け込むと、すぐに電話をかけた。

「なんや工藤・・・むふお、あつっ!」

『平次、お好み焼き焼けたで!』

「先食つててくれへんか? やーすまんすまん。今お好み焼き食うててな・・・なに?」

「実はさ・・・・・・・・・・だから代わりに歌つてくれないか? 変声機あるし・・・・・・・・。」

「つたく卑怯な奴やな。」

「お前に言われたくねえよ。」

「まつ、ええわ。ほな一回切るわ。和葉がつるさいんでな。」

「次は音痴の名探偵、工藤新一!」

「くどーう! ビリになれよ!」

「ドンマイ!」

新一は「ホコホ」と咳をして・・・

「では・・・。」

「ちょっと蘭、あなたの旦那うまくない？」

「うそでしょー！」

「や、やべー。」

「音痴じゃなかったんだ・・・。」

パチパチ・・・

「すーいー！」

「ヤバいー！」

「さすがさすがー！」

「ビビりじゃねー。」

「やー照れるわ。おーきに、おーきに。」

「「???」」

「新一?」

「げ!?! お、おいはっど……ヤバッ。」

ぶちっ……

「工藤?」

「なんだよ、さっきの関西弁。」

「あつ、えーと、そのー。」

「工藤君、今すぐ上着を脱いでくれない?」

「なんだよ宮野、今夜は寒いだろ……あー寒い寒い。」

「今すぐ上着を脱ぎなさい!」

「ひっ……。」

「新一!」

ついに蘭が動いた。

「わ、わかったよ・・・ちえつ。」

上着の下には、開いたままの携帯電話に変声機。

「わー！！」

「サイテ！」

「工藤！！」

プルルルル・・・

「な、なんだよ服部。」

「何で勝手に切るんや！ 工藤！」

「いや・・・ってお前が余計なことするから！」

「なんやて！ そもそも・・・。」

その後、細工なしで歌った新一は・・・

「・・・5点？」

「始めてみた・・・5点とか・・・。」

急に新幹線は静まり返ってしまった。

園子も苦笑い。

嫌な雰囲気 flowed。

「やつほー！ 遊びに来たわよ！」

「ちよつと由美！」

「わたしたち警察もいれてよね！」

「ちよ、ちよつと・・・。」

「新一おにーさん！ 蘭おねーさん！ 志保おねーさん！」

「遊びに来ましたよ！」

「お、食い物いっぱいあるじゃねーかよお。」

「じゃあ、もう罰ゲームとかなしで！」

園子がまた叫んだ。

「マジで!?!」

「ゴミは工藤君持ちね。」

この日の夜、新幹線沿線の住人から、苦情の電話が殺到したのはいつまでもない。

解散

「ふあああ……もう着いた？」

「ああ、着いたぜ。」

「すんごく遅くなっちゃったね……ふあああ……。」

疲れ果てていた蘭はそのままぐっすり寝ていたらしい。

「じゃあな工藤。またいつか。」

「ばいばい……蘭ちゃん、志保ちゃん……ふあああ……。」

「黒羽君、こっちですよ。ではいずれまた。」

眠そうな青子をつれた快斗たち江古田高校の生徒たちはバスに乗っていった。

「帝丹はこっちだぞ！」

帝丹高校の生徒もバスに乗り込んだ。

「さあて、無事バスに乗れたが……どうだったか？ 今回の宿泊

研修は？」

「「「「なんか疲れた!!!!」」」」

「「「「事件多すぎ!!!!」」」」

「ってゆうか……。」

「「「「工藤たちと二度と一緒に旅行したくない!」」」」

「それはないだろ……。」

「先生は思わなかったんですか？」

「あいつと関わると絶対事件が起こる。」

「もつやだよー!」

「そういえば工藤君まえに言われてたわね。疫病神って。」

「宮野……おめえ……。」

「「「「この疫病神め!」」」」

「工藤のせいで学園祭で殺人事件」

「修学旅行も宿泊研修も事件ばかり」

やっとここさ帝丹高校に着いた。全員へとへとだった。

「……とにかく無事終わってなによりだ。実行委員もおつかれさま。」

「どーも。」

「鈴木！ おめーなにもやってないだろ！」

「そーだそーだ！」

「誰が金出したか知ってるの!？」

「まあまあ。じゃあ、解散だ。気をつけて帰れよ!」

こうして、江古田帝丹合同京都宿泊研修は無事(?)終了した。

エピソード 警視庁の取調室

「おいつ、答えろ！」

警視庁の一室で、えりすぐりの強面の刑事たちが吠えた。

「なんであんな組織にしたんや！」

それも全国から集まったこわーい刑事達。

警視庁はもちろん、大阪府警、静岡県警、神奈川県警、長野県警、京都府警からも集まっていた。

「ははあ、こえー！」

部屋の外、マジックミラー越しに見物している新一たちもあきれはじめたころ……。

「わ、わかりました……。」

警視庁に身柄を移されてから、杉野太一は初めてまともに答えた。

「黒の組織にあこがれてたんです……。」

「はあっ!?!」

「だって……かつこよかったから……だから……。」

「それでスネイクと!？」

「へえ……。」

全員、あきれてものもいえなかった。

エピローグ 警視庁の取調室（後書き）

これでラストです。

いままで読んでくださり、ありがとうございました。
続編や番外編もいつか出せれば、と考えています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6703m/>

日が昇り、京の景色は美しい

2011年7月6日14時46分発行